
恋姫無双と一人の創造主の冒険

シュヴァルツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫無双と一人の創造主の冒険

【コード】

N9140M

【作者名】

シュヴァルツ

【あらすじ】

少年は、いつもどおりの時間に目を覚ました。

しかし、自分の部屋ではなく、違う世界が広がっていた。

初めまして、新参者のシユビアルツです

初めまして、新参者のシユヴァルツです。

初めて書いたものなので、どうか暖かい目で見てください。

この物語は、一人の高校生が恋姫の世界に迷い込むというお話です。また、実際の恋姫のキャラとは、性格が違つかもしれませんので、そこは、ご了承ください。

ここからは、プロローグです。

この外史と呼ばれる場所にまた、新たな転生者が呼ばれた。彼はなぜこの場所に呼ばれたのか、そして何をするのかそれは神のみぞ知ることができる。さあ、新たな、外史の幕開けである。

初めまして、新参者のシユビアルツです（後書き）

初めてなので誤字、脱字があるかもしれません。

その時は、教えてください。後何か要望がありましたら
どんどん送ってください。

キャラ設定

名前：仙道 海

高校3年で、卒業が近い時にこの騒動に巻き込まれた不幸な少年、背は、183?と高めの方である。軍事関係、歴史関係には、もっぱら強い。恋愛には鈍感である。

部活には、剣道部に所属しており強かったという噂があるが、本人は、「それほどでもない」と言っているが噂はあながち間違っていない。

また、趣味はサバゲーで休日には、友達と、一緒に出かけたりするほどである。サバゲーの方でも全国大会でチームを優勝に導いている。

神：仙道を間違えて殺してしまった張本人である。殺してしまった代わりに外史に飛ばす

それは突然きた。(前書き)

小説は難しいここで書いてる人の気持ちが変わりました。
後書きでキャラと作者の反省会があります。そちらも見てください。
ださい。

それは突然きた。

俺は、仙道海 高校三年でもうすぐ卒業がまじかに控えている。その日もいつもどおり、学校が終わり、剣道部の後輩たちと部活動をやって家に帰った。

風呂に入り、その後ゲームをやって12時ごろに銃の整備と最新のエアガン情報調べて、寝た。今思えば、あれは、序章に過ぎたのかもしれない。

仙「うゝん、あれ？ここどこ！？」

起きてみたらそこは真つ白い世界であった。周りには何もなかった。白い世界が広がっていた。

????「起きましたか？」

仙「あんただれ？」

????「私は神です。」

仙「ふーんで神様が俺に何用なの？どうせ夢オチでしょ？」

神「いいえ、夢ではありません。現実なのです。」

仙「えっ？」

神「あなたは死んだのですー。」

仙「ええー！！なんでどうして、俺が死んでるの！？だって、昨日とかちゃんと家で寝たぜ？」

神「私が殺してしまいました。御免チャイ^^」

仙「ふざけんなー！！！！」

バキヤー

神「ウゴハアアアア」

仙「で、なんで俺は死んだのかな？」

神「はい、実は、私の手違いでして本当は死刑囚を殺すはずがあなたになってしまったのです。ごめんなさい、生まれてきて御免なさい」

因みに今の状況は、仙道の前で神様がぼこられた状態です。

仙「どうしてくれるのかなあ。俺の人生ここで終わっちゃったじゃねえか。」

神「はいそれに関しましては、ちゃんと用意してあります。」

仙「どんなのだ？」

神「異世界に転生して見るというのはいかかでしょうっ？」

仙「おっいいねー、因みにどこに行くのかもあり？」

神「はい、あります！」

仙「じゃあ、恋姫無双の世界で、」

神「わかりました。後、お詫びの追加なのですが、私の能力をあげましょう。」

仙「それって神の力ってこと？」

神「はい！」

仙「もらった!!！」

神「では、さっそく行ってみましょう」

仙「おう。」

こうして、仙道は、恋姫の世界にむかった。

それは突然きた。(後書き)

作「初めまして、作者のシュヴァルツです。」

仙「仙道だ」

作「いやぁー初めて小説書いてみました。」

仙「初めてなのによくここまで、書けたな。」

作「ほんとだよーまじで疲れた。」

仙「まあこのちょうしでがんばれや。」

作「はい 後次回は、仙道の能力について教えまーす。」

仙道の能力設定

仙道の能力設定（FATE風に書きます）

気力：MAX 俊敏：MAX

防御力：MAX 体力：MAX

索敵能力：MAX 銃スキル：神

創造・想像

この能力は、仙道が思った武器や、車両が、作り出せるというチート的なものである。

また、現代世界の軍隊も作り出せることができる。

王の宝物庫

この宝物庫は、無限に物を入れることができました、すべての物（食糧から日用品はたまた、危険物など）が入っている。

逆鱗

仙道は普段、優しい奴だが、本気で怒ったときは手が付けられなくなる。また、嫌いな奴なら、徹底的にぶちのめした後、拷問という名の説教を始める。

また、仙道は銃のスキルが半端ないので、早打ちでもだれも勝てないほどの力がある。

仙道、賊と戦うでも、一方的じゃね？

仙道は、目を覚ました。

仙「ここが、恋姫の世界か」仙道は内心ウキウキしていた。なんせ、自分がゲームをしていた物の中に入れたからである。

仙「これからが楽しみだなー んっ？ポケットに何か入っている。」

ポケットには一枚の紙が入っていた。

仙「なんだこれ？」

紙を広げてみた。

神「やあ、無事に着いたみたいだね。もう君は、わかっていると
思うけど恋姫の世界いる。あと、真の方のキャラも入っているからそこんところ宜しく！！それと能力も
使えるようにしたから。」

仙「へえ、真の方も入ってるのか」

神「後、ルートの的には、呉方面だから、それじゃあがんばってね」

仙「神の野郎途中で投げ出したな。」と文句を言っていた時声を掛けられた。振り返ると、そこには、

5万人はいるだろう盗賊がいた。

???「おい、兄ちゃんいい服着てんな」

仙「はい、なんででしょうか？」

あくまでも、いい人を装う

アニキ「とりあえず、服、全部脱いで消えな。」

仙「それは、無理というものです全部脱いだら、困りますもの。」

ア「そんなこと、俺は知らねえよ」

このとき、仙道は思った。

「ああ、こいつら人間の屑だな。」

ア「どうしても置いてかねえっていうんなら地獄を見ることになるな。」

仙「それをあなたができますか？」

ア「あんだとう!？」

仙「俺が見せてやるよ本当の地獄ってやつを。」

ア「はっ、これだけいるのにテーマはどつ戦つって言つんだ第一武器すら持ってねえじゃねえか」

仙「俺にはこいつがある。そして、俺は一人じゃねえよ。」

ア「なに？」

そしておもむろに手を挙げると。仙道の後ろから、突然、歩兵やら戦車やらがでてきた。

ア「なっなんだありや!!？」他「あんなのみたことねえ」他2「ばっばけもんだ」

そのころ、仙道の内心は、「うほー本物のエイプラムズキター」と喜び興奮していた。

ア「ひるむなー!どうせ倒せばいい話だー」

仙「命を掛けるあるいはこの身に届くかもしれん」

そして、仙道が手を下した瞬間、エイプラムズの120mm砲が火を吹いた。その瞬間中央にいた盗賊

の半分が吹っ飛んだ。そこからは、一歩的な虐殺が始まった。ある者は、機銃の餌食になりまたある者

は、歩兵のRPGの餌食となった。そして、仙道も先頭に立ち武器を使っている。(因みに今使っているの

は、デザートイーグルと日本刀(村雨)を持っている。)

そして、5分も立たないうちに盗賊は全滅した。

仙「ふう、やっと終わったか。」と言ってすべての物を消した。

しかし、戦場にいたのは仙道だけではなかった。

「???」なにあれ?」

「???」僕にもよう分らん。」

「???」じゃあ直接聞いてみましょうよ。」

「???」それは、危険じゃ堅殿」

堅殿?」でも、それじゃないとどう考えてもなっとくできないじゃない。祭もそう思うでしょう?」

祭?」しかし、」

堅殿?」それに、あの子からは、ものすごくでかい何かがある。」

祭?」それは、感かのか?」

堅殿?」ええ」

祭?」やれやれ、後でどうなっても知らんぞ。」

堅殿?」ありがとう」

そして、その二人は、仙道に向かって歩いた。

仙道、賊と戦うでも、一方的じゃね？（後書き）

作「つksれts-」

仙「何言ってるのかわらんぞ」

作「疲れたって言ったの！」

仙「あれくらいで名に入こたれている。あれ以上に頑張っている小説家はた

くさんいるぞ。」

作「それでも初心者だから仕方ないだろー。」

仙「まあそれはおいおい頑張っていくしかねえよ。」

作「うん」

仙「後でなんか奢ってやるから。」

作「頑張って書かせてもらいます!-!」

仙「その調子だ!-!」

仙道、呉に従順する

仙「さて、これからどうしようかな
そこにいる二人はどう思う?」

???「いつ、気がついた?」

仙「そんなに殺気を出されて気付かない人はいないとおもいますよ
?」

???「そうか、それは失礼した。だが、よく一人で5万もの盗賊を
倒したな。どうやった?」

仙「ああ、このこと?」

???「!?!」

驚くのも無理はなかった。先程まで何もなかった所から、突然、戦
車とか装甲車が出て来たのだから

???「おぬし、妖術使いか!?!」

仙「いや、これは俺の力というか神様がくれた物だから。」

???「なるほど、あつそう言えば名を名乗っていなかったな。

私は、孫堅よ、」

「????」「儂は黄蓋じゃ」

仙「俺は仙道 海です。」

孫「あなた、これから行く宛はあるの?」

仙「いや、ない」

孫「じゃあ、これから私達のお城にこない?」

仙「いいのか?」

孫「ええ、もちろんあなたも良いわよね?祭?」

黄蓋「もちろんじゃ」

仙「じゃあ、案内お願いします。」

「こつして仙道は、呉に行くことになった。」

仙道、呉に従順する（後書き）

作「終わった」

仙「今日はずいぶんと時間が掛ったな」

作「だって、また、テストが始まったんだもん」

仙「それは、仕方ないな」

作「まっこれからもがんばっていきたいので頑張ります。」

仙「その調子だ!」

仙道、天の身遣いになる

戦場から数分後、仙道一行は果業に着いた

孫「そういえば仙道、占いのことを知ってる？」

仙「占い？何それ？」

孫「自称大陸一の管轄が言っていたのだが、「この地悪となると
天から未来の武器、兵隊を持った少年
が現れるであろう」という物でな今までの出来事から推察するにあ
なたの事なんじゃないかなと思って」

そう仙道の今までの武器、兵隊から察するにそれが、あてはまるの
である。

仙「へっ？おっ俺!？」

黄「うむ、確かに今までの行動からするにお主が妥当ではないか？」

仙「いやいやいや、俺、そんな大層な物じゃ無いから！」

孫「いや、それが妥当でしょうね。よし、決めた！」

仙「何を？」

仙道は、分かっているにも聞いてしまう。

孫「あなたを天の身遣いとして呉に招こう!！」

仙「はあ！？いやいやいや、ちょっと待って！」

孫「一度決めたからには曲げられないぞ。あっそつだ祭ちよつと来て」

黄「なんじゃ？堅殿」

そして、孫堅と黄蓋は仙道から離れてひそひそ話を始めた。

そして、10分後・・・

孫「仙道」

仙「なつなに？」

孫「あなたには、天の身遣いとしてなってもらいたいんだけど、条件があるの。」

仙「どんな？」

孫「まず一つ目、あなたの天の知識を教えなさい。」

仙「ああ、それなら構わないよ。（知識ならあつちのが十分使えるかもしれないからな）」

孫「二つ目、武将として働いてもらいたいの」

仙「それも構わない。むしろ、ありがたい、俺、頭そんなに良くないから」

孫「そして、三つめなんだけど・・・」

仙「(どんなのなんだろうな)」

孫「種馬として働きなさい」

仙「はい？」

(いま、どう見てもとんでもないものが出てきたような。)

孫「だから、種馬として働いてほしいの。あつもちろん、嫌な子に無理やりは駄目だからね。」

仙「俺もそんなことはしないってちがーう!!」

黄「なんだ、意外と初心なんじゃな。公認で女とやれて嬉しいじゃろ？」

仙「1と2はいいとして、3の理由は？」

孫「それは、簡単よ。天の身遣いの血が呉に出回ったとすれば、庶人たちにとっていいネタになるじゃない。」

仙「なるほど」

確かに、天の身遣いという訳の分からないもの、未知なるものが出れば人が集まるといふことか。

少し仙道は、考えた。

仙「よし、分かったそれじゃあ孫堅達に協力するよ。」

孫「やったーありがとう。じゃあ、改めて自己紹介するわね。姓は孫、名は堅、字は文台、真名は、大蓮よ。」

黄「ほう、真名まで、許すか。ならわしも、姓は黄、名は蓋、字は公覆、真名は、祭じゃ。」

仙「あの、真名ってなに？」

大「あなたの国じゃあ真名はないの？」

仙「うん」

祭「真なる名と書いて、真名と読む。これは、その人物の神聖なる言葉で、例え、その言葉を知っていても言っではならない。言ってしまったら最後、首を落とされても文句は言えないものなのじゃ。」

仙「そんな神聖なもの、俺に教えていいの？」

大「いいのよ、だって、あなたは、もう私たちの仲間なんだから。」

仙「わかった。ありがとう。じゃあ俺も改めて姓は仙道、名は海、字と真名はないから、好きな方で読んで。」

満面の笑みで自己紹介をした。

大・祭「っ！！！！¥¥¥」

仙「どうかした？」

大・祭「いいや、何も！！」

仙「？」

大「まさか、こんな子にドキドキしてしまうなんて」

祭「な、なんじゃこのドキドキは？」

二人とも、仙道の笑顔にドキドキしてしまったようだ。

大「そ、それよりも城にむかいますしょう？私たちの仲間を紹介するわ。」

仙「ああ、分かった。」

こうして、仙道は城に向かいました。

仙道、天の身遣いになる（後書き）

作「第7話、終わり」

仙「今回も無事に終わったな。」

作「いや、孫堅の真名考えるのに時間食っちゃったよ。」

仙「どうせ、文才の能力はないからな。」

作「ひ、ひどい。」

仙「本当のことだろうっ？」

作「はい。」

孫呉の仲間たち

仙道達は、城に着いた。

仙「城、でか！！」

大「そう？」

仙「うん、俺のいた世界じゃ、ここまででかい城は、なかった。」

祭「そうなのか。」

大「それより、私たちの仲間を紹介するわ。ついてきて。」

仙「わかった。」

そうしてしばらく歩くと、一際大きな部屋に案内された。王宮みたいな所だな」と仙道は思っていたそして、数分後人が集まった。

????「お母様、一体どうしたのですか？みんなを急に集めて。」

大「ごめんなさいね。でも、紹介したい人がいるから集まってもらったの。」

王宮の真ん中には、一人の男が立っていた。特別、強そうには見えなかった。

????「この方は？」

大「私が盗賊討伐に行っていたのは知っているだろう？その時に助けてもらった。」

全員「えっ!？」

??? サイド

私は、信じられなかった。あの母様が助けられるなんて、しかも母様より貧弱そうな男に助けられていたのだから

??? サイドout

大「とりあえず、みんな自己紹介しな。」

??? 「わかったわ。性は、孫、名は、策、字は拍符よ。母様を助けてくれてありがとう。」

??? 「性は周、名は諭、字は公瑾だ。」

??? 「性は孫、名は権、字は仲謀だ。おまえ、本当に強いのか？」

仙「まあ、一応」

孫「胡散臭いな」

仙「何？」

孫「だつてお母様が遅れを取る筈ないもの。」

仙「ようし、わかった孫権、俺と勝負しろ、実力で分かせてやる。」

孫「わかった後で中庭に来い。」

そうして全員の紹介が終わり仙道の番が来た。

仙「仙道海だ。大蓮の紹介でここに来た。」

すると、周りがざわついた。無理ものない。主の真名を言われたのだから

権「貴様！！なぜ母様の真名を呼ぶ！！」

仙「そりゃあ、許されているからな。」

権「なっ！？ほ、本当なのですか？母様。」

大「ええ、本当よ。因みに祭も許しているから。」

祭「うむ。」

大「あっそれと、海には天の身遣いをしてもらうことになっているから。そして、海があなたたちの夫になるかもしれないから」

全員「え！？」

これは、驚いても仕方ないと思う。いきなり現れた男が、自分の夫になるのかもしれないからだ。

権「なぜですか!？」

大「そりゃ、天の身遣いっていうすごいものが、現れたら庶人は食いつくじゃない。」

権「そりゃあそうですけど。」

大「大丈夫、もし本当に嫌なら孕ませないから。」

仙「それは、さすがに引けるから。」

権「そつそれより仙道、勝負しろ!！」

仙「ああ、いいよ。」

そして、仙道と孫権は中庭に向かった。

孫権と勝負！！

そして、仙道と孫権は、中庭についた。因みに、呉の将全員来ている。

大「じゃあ、私が審判をするから。勝負の判定は相手を戦闘不能にしたらありとする。分かったか？」

仙「ああ」

権「分かりました。」

仙「命を掛けるあるいはこの身に届くかもしねん」

権「あなたなんか直ぐに倒してあげるわ」

その目は獲物を狩る目だった

大「では、始め！！」

始まった瞬間、孫権が動いた。

権「はあああ！！」

仙「おっと。」

しかし、仙道はあっさりと避ける。しばらくは、その行動が続く。

権「はあ、はあ、おまえも攻撃してこないか！！」

仙「分かったよ。」

すると、海は、長刀を出した。

大「あれ？海、あなた、確か普通の刀つかってなかった？」

仙「ああ、あのときは、賊が多かったから、取り回しの効くやつを選んだんだよ。」

大「そういうことね。」

仙「それじゃ、今度は、こっちから行くぞ。」

その言葉を言った瞬間、海の一方的な攻撃が始まった。

権「くっ」

仙「それでは、そろそろ終わりにするか。」

孫権は危ないと思ったのか距離を取った。

しかし、仙道は、一気に距離を詰めた。

仙「この技は、俺の国で使われていた技だ。とくと味わえ!!!」

「秘剣、燕返し!!!」

孫権は避けられると思ったしかし・・・

権「えっ！？きゃあああああああ！！」

そして、孫権は倒れた。

大「勝者、仙道海」

仙「これで、分かっただろう。実力の差というやつをな。」

大「すごいじゃない、海」

策「あの技、どうやったの？」

仙「ああ、三つの剣筋を一気に出しているだけだ。」

策「その技、私にもできない？」

仙「うーん、多分できると思うよ。」

策「ほんと！？」

仙「ああ、」

策「やった〜」

仙「それで、大蓮、さっきからなんで、足を踏んでるの？」

大「ふんっ知らない！」

大蓮は不機嫌になっていました。

仙「??」

権「さっきのことは、謝る。このとおりだ。」

そういつて、頭を下げて謝った。

仙「いや、俺も悪かった。つい力っとなってしまうて」

権「かわりに、私の真名を受け取ってくれる?」

仙「いいのか?」

権「ええ、あなたの实力は、よくわかったわ。だから、受け取ってほしいの。」

仙「分かった。受け取らせてもらうよ。」

権「蓮華よ。」

仙「分かった。蓮華」

策「じゃ私も雪蓮よ。」

仙「わかった。」

そのあと、他の者も、全員、真名を海に渡した。

雪「そういえば、海のってどんな力があるの?」

仙「ああ、こんなのか使えるよ。」

徐に、戦車を出した。

全員（大蓮と祭以外）「！！！！？？」

仙「まあ、こんなところだ」

雪「すごい！！っでこれなに？」

仙「それは、戦車といって、未来の世界の乗り物だよ。」

冥「これが乗り物なのか？」

さすが、軍師団は興味を惹かれていた。

仙「さて、さすがに疲れたから、少し休むよ。大蓮、部屋とかあるか？」

大「ああ、それと、お前が仲間になった祝いとして、宴を開くぞ。」

仙「分かった。それじゃ、時間になったら、起こしに来てくれないか？」

大「わかったわ。」

こうして、勝負は、海の圧勝となった。

孫権と勝負！！（後書き）

作「八話目終了」

仙「まったく、いつまで掛っているんだ。」

大「まったくだ。」

仙「うお！？いつの間に行った、大蓮。」

大「つい、さっき」

仙「そっそうか」

でもいつから殻次回も頑張っている

人がゴミのようだ！

孫権との勝負から数カ月後、昼食を済ませていた仙道は、自分の部屋にいた。昼寝でもしようかとしていた時使用人から大蓮が呼んでいると言われたため、宮中に向かっていった。

仙「悪い、遅くなった。」

仙道が宮中に着いた時には、みんな集まっていた。

大「ああ、いいんだよ、海急に呼び出してごめんね。」

仙「いや、大丈夫だよ大蓮、それより、みんな集まってどうしたんだ？」

大「それを、今から説明するよ。冥琳」

冥「はい、大蓮様」

冥「冥では、これより軍議をする。今から一刻ほど前に黄巾党と思われる賊が出現した。」

仙「黄巾党？」

雪「最近、巷で騒がれている賊よ。」

仙「ふーん」

冥「数はおよそ10万だ。」

仙「じゅ、10万!？」

雪「そんなに多いの？」

これには、さすがの雪蓮も驚いた。

大「さて、どうしようかね」

仙「ちよつといいか？」

大「んっ?何、海。」

仙「先鋒を俺にやらせてほしい。」

大「理由はあるの?」

仙「ああ、試して見たい事があるんだ。」

大「分かった。いいよ。」

冥「他に意見は無いか?では、解散。」

こうして俺たちは、それぞれ準備を開始した。

そして、仙道達は、平原に向かって行軍していた。その道中

雪「ねえ、海。」

仙「んっ?何だ、雪蓮。」

雪「さっきの軍議の時言ってた、試して見たい事って?」

仙「ああ、その事か、俺はまだ、この技を全部把握していないんだよ。」

雪「へーまだ、他にあるんだ。」

仙「うん。だから、せんぼうにしてもらったんだよ。おっ、敵さんが見えてきたぞ。」

すると、賊がどんどん沸いて出てきた。

雪「それじゃあ、海頑張ってね。」

仙「ああ、」

そう言っつて雪蓮が離れっつていった。

仙「さて、」

そう言っつと仙道は、賊の先頭と思われる所に向かった。

仙「あの〜すみません。」

賊サイド

俺たちは、いつもの様に狩りに向かっていた。

賊・他「頭、あれを!」

頭「ん？」

見るとそこには、1人の男が立っていた。

????「あの〜すみません。」

頭「なんだい？兄ちゃん」

????「少々、お願いがございまして」

頭「ほお〜どんなのだ？」

????「ここから引いてもらえませんか？」

頭「それは、無理というものだけ。」

それを聞いた青年は

????「そうですか。それでは、死んでもらいましょうか」

頭「何いってや・・・」

ダァン！！ドサッ

賊サイドアウト

仙「それでは、死んでもらいましょうか」

俺は賊の頭らしき人物と話して分かった。

黄巾党はクズの集まりであると、きつと頭目の張角というのも腐った奴であると。

そして、頭の話を書く前に、デザートイーグルで頭を撃ち抜いた。

他の賊共は突然のことで、何が起きたか分からない様子だったが、数十秒後・

賊「てめー何しやがるー!!」

仙「うるせえ、とつととかかってこい。」

賊「構うことはねえ、全員で殺つちまえー!!」

すると賊は全員で突撃を開始した。

仙「ふんっどうやっても突撃しか能の無いやつらだな。」

そして、仙道が手をあげて戦車部隊を出し一斉砲撃を掛けた。

仙「撃てー!!」

ドオン!!ドオン!!ドオン!!ドオン!!ドオン!!

人がゴミのようだ！2

大蓮サイド

大「そろそろ始まるかねえ。」

雪「そうじゃない？」

私は、海に先鋒をまかせていた。彼の作戦では、「俺が一手打つか
らその後、全軍で突撃して乱戦に追い
込んでくれ」というものだった。あっさりしていて海らしいものだ
と私は思った。

蓮「仙道、大丈夫かしら？」

大「おや？蓮華は海のこと心配で仕方ないのかねえ。」

私はニヤニヤしながら言った。

蓮「べつ別にそこまで心配してるわけではありません！」

雪「あらっ心配じゃないの？海ったらかわいそう。」

蓮「姉様！！」

大「あっはっはっは！！」

蓮「お母様もそこで笑わないでください。」

大「いや、すまんすまん。」

と家族で笑い合っていると轟音が聞こえてきた。

ドオン！！ドオン！！ドオン！！ドオン！！ドオン！！

雪「なつなに！？」

大「きつと、海だろ。よし」

そう言つと私は、兵士たちの方に向いた。

「皆の者聞けえい！！」

兵士たちは全員が私の方に向いた。

「これから、私たちは、敵陣に突っ込む！！相手は獣と思え！！決して慈悲など思つなよ。それが、仇となつて帰つてくると心得よ！！」

兵「応！！」

大「全軍、突撃！！！！」

兵「うおおおおお！！！！！！！！！！」

私たちは、突撃を開始した。

大蓮サイドout

「うおおおおお！……！！」

仙「とうとう来たか。」

俺は、戦車部隊を指揮しながら後ろから聞こえてくる呉軍の声を聞いた。賊共にも動揺が走ってるように見えた。

そして、呉軍と賊がぶつかって予想どおり乱戦になった。しばらくすると、大蓮が来た。

大「海、大丈夫か？」

仙「俺は、全然。むしろ、賊共の方がかわいそうに見えてきた。」

大「はっはっはそうか、それで、この後は、どうする？」

仙「そうだな。賊共の後ろって、たしか、古城があったよね？」

大「ああつ。奴らは、そこを拠点にしていると間者から報告があったの。」

仙「じゃあ、奴らを一回その拠点に押し込むことってできる？」

大「できるが、なぜなの？」

仙「奴らに天罰というのを教えてやるのさ。」

大「よし分かった。」

そうして、賊共は古城に籠城した。そこから、数キロ離れたところに自分たちの拠点を構築した。

天幕内

大「さて、敵は籠城したが、どうするのだ？海。」

仙「これから俺が単騎で古城の前に行って警告して応じなかったら、天罰を食らわせてやるのさ。ふふっ
ふっふっふっふ。」

仙道から黒いオーラが出ていた。

全「怖っ！！」

大「よっよし、わかった。海、行ってきてもらえる？」

仙「承った。」

そして、仙道は天幕から出て移動の準備をした。

仙「どうしよっかな。あっそっだ！」仙道は何かを思いつくように想像した。

仙「やっぱ、あれしかないでしょ。」

そう言って仙道の前に出てきたのは、一台のハンマーだった。特にこれといったものはないが、バ〇オシリ
ーズで活躍した車両で、横には、B〇A Aのロゴがあった。

全「なにあれ？」

仙「あれ全員、出てきたの？」

大「ねえ、海それは？」

仙「ああ、これはハマーって言って俺たちの国の物だよ」

全「へえー」

雪「乗り物ってことは、当然乗れるんでしょ？」

仙「もちろん、何なら乗ってみる？」

全「乗りたい！！」

仙「分かった。だけど、全員乗れるわけじゃないから順番、決めてね。」

そして、呉の武将を全員乗せた後、仙道は、古城に向かった。

仙「これだな。」

そう言うと車から降りて古城に向かって叫んだ。

仙「おーい族共！今から降伏してくれば悪い様にはしない半刻ほど待っててやる。その間に出てこい！」

賊「誰がてめーなんぞに降伏するかってんだ。馬鹿。おい、野郎

共、あいつに矢の雨を食らわせてやれ！」

賊・他「応」

すると、仙道向かって矢の雨が降り注ぐ

大連と他のみんな「仙道！！」

仙「ふんっそんなちっばけなもので俺を殺れると思ってるの？」

賊「なに？」

仙「ベルリンの壁！！」

そう叫ぶと仙道の前に壁が出てきて矢を全部防いだ。

賊「何だありゃ！？」

賊は動揺していた。

仙「さあ、今度はこっちから行くぞ。」

仙道が、手を上げて言った。

仙「君たちにラピュタの力を見せてあげよう。」

すると、地面から列車砲を彷彿させる巨大な砲身が出てきた。

目標、1000m先の古城（電子音）

仙道は、孫家三人からハグされていた

祭「モテモテじゃな。海よ」

仙「祭も見えないで助けてよ」

祭「それは、無理じゃな。」

仙「そんな」

こうして、賊討伐は終了した。

人がゴミのようだ！2（後書き）

作「終わった」

仙「やつとか」

大「遅すぎよね」

作「仕方ないじゃんテストだったんだし」

大「本当はそんなこと言ってネタがないんだだけじゃないの？」

作「ギクツ!？」

仙「よく分かったな」

大「あら、そうなの？私、感で言ってみたの。」

作「怖ッ孫家怖ッ！

孫呉の休日（前書き）

あせらない、あせらない
一休み、一休み

孫呉の休日

賊の討伐から数日後、仙道たちは、休日になっていた。

孫「あつゝい、あつゝい、あつゝい！」

暑いと叫んでるのは孫家の末娘の孫尚香である。彼女は賊討伐の後合流していた。彼女は今まで、私塾に通っていた。(もちろん、大蓮の要望で)

蓮「暑い暑いうるさいわよ!!!シャオ!!!」

シャ「ぶゝじゃあお姉ちゃんは暑くないの？」

蓮「そりゃ暑いわよ。でも、日々鍛練を積み耐えられるわよ。」

????「あつゝい。」

シャ「かあ様。」

大・雪「暑い、暑い。」

蓮「~~~~っ!!!姉さま・お母様!!!」

大「いゃん!?何で、蓮華怒ってるの?怖〜い」

雪「こわ〜い」

シャ「暑い暑いうるさいんだって。」

蓮「気が緩みすぎなのです。」

大「そりゃ、こんだけ暑けりゃ誰だってやる気なくすわよ。」

仙「そりゃそつだ。」

蓮「海！」

シャ「海、やつほー。」

大「海、あつゝい」

雪「同じく」

仙「ういゝす」

大「ねえ、海、どうにかならない？あなたの知識で」

仙「うゝんこの時期ってみんなどうするの？」

雪「そゝね、大体は水浴びに行ったりするけど」

仙「うゝん水浴びか。（だったらあれしかないよな。（よし！）」

雪「なになに、名案あるの？」

仙「うん。なあ大蓮この近くに海とかあるか？」

大「海？」

仙「ああ、」

大「あることはあるけど、ここからだと遠いよ？」

仙「距離はどのくらい？」

大「確か、5里くらいだったかな。」

仙「よし、決まりだ！！」

雪「何が？」

仙「俺の世界では、海水浴っていうのがあってな。」

全「海水浴？」

仙「そう。基本的には、水浴びと同じだけど海岸まで行って遊ぶんだよ。」

蓮「でも、どうやって行くの？」

仙「もちろん、俺の力で。」

大「あの、はまーっていうやつかい？」

蓮「でも全員では乗れないじゃないの。」

仙「大丈夫、大丈夫、俺に任せて。それじゃあ、一刻ほど門の前にいて。」

大「わかったよ。」

そういった後、仙道は町のほうに行った。

商「おや、旦那、今日はどうしたんですか？」

仙「ああ、例の物ができていることだと思ってね。」

商「おお！あれのことなら、心配いらないぜ、旦那。」

仙「本当か！」

商「ええ、」

仙・商「ふっふっふっふ」

端からみたら、とても怪しく見える。

そして、一刻ほど・・・

呉の武将全員がいた。

大「みんな、集まってるよね？」

全「はい！」

????「あのく大連様。」

大「ん？なんだいお前たち。」

「????」「私たちも行ってよろしかったのですか？新参者なのに」

大「そんなことか、気にしなくていいんだよ。全部、海の要望なんだから」

「????」「はあ。」

仙「みんな〜!!」

大「おつきたみたいだね。」

海の声が聞こえた方向に向けるとみんなが見たことのない物に海が乗っていた。（現代物だから当たり前だけど・・・）

仙「おまたせ〜待った？」

大「いや、丁度集まったとこだよ。そうそう、海に紹介したいもの達がいるんだけどいいかい？」

仙「もちろん、仲間が増えることはいいいことだよ。」

大「そりゃ良かった。ほれ、お前達。」

「????」「はっはい！姓は周、名は泰、字は幼平、真名は明命です！」

「????」「私は〜姓は陸、名は遜、字は拍眩、真名は穩です〜」

「????」私は、姓は甘、名は寧、字は興簸、真名は思春だ。お前、本当に強いのか？」

「????」はっはい、姓は呂、名は蒙、字は子明、真名は亞しえです。」

仙「みんな、よろしくね。所で、思春、さっきのはどついつの意味かな？」

思「そのまんまだ。本当に強いのか？とてもそうは思えん。」

仙「なら、一勝負してみる？」

思「ああ、望むところだ。」

仙「というわけで、どうだろう。大蓮？」

大「いいんじゃない？まだ、認めてないっていうんならやってあげれば？」

仙「よし分かった。」

この続きは、次回に・・・

休日2（前書き）

今度こそ海へ・・・

休日2

思春から試合を申し込まれたので、応じることにした。

大「それじゃあ、前と同じで、相手を戦闘不能にしたら勝ちってことだ」

仙「分かった。」

思「分かりました。」

大「では、始め！」

そう言った瞬間、思春が動いた。

思「はああああ!!！」

仙「おっ速いな。」

そして、海の得物は、槍のような形をした鎌である。

仙「よつと。」

ガキン!!ガキン!!ガキン!!

大「うん、あの得物で速く動けるとはすごい。」

祭「まったくじゃ」

二人は、海の得物に興味を持っていた。

そして、しばらくして、思春は、疲れていた。そして、海が攻撃してこないことに苛立っていた。

思「どうした、攻撃して来い！！それとも、臆したか？」

仙「君の攻撃の仕方を見ていたんだよ。それじゃ、今度はこっちから、行かせてもらうよ。」

そういうと仙道は攻撃を開始した。

思「なっ！はっ速い！？」

それでも、海は、どんどん攻撃してくる。

仙「そろそろ決めるか。」

そう言うと、距離を離していった。

仙「今度の技はな、ある王が考えた技だ。とくと見よ！！」

そして、海が手を上げると。彼の背後がどんどん赤くなっていった。

全「なっなんだあれは！！」

そして、その中からあらゆる武器が出てきた。

仙「ゲート・オブ・バビロン」

そう言う中の中にあつた武器が矢の如く発射されて、思春の方に向かつていった。

思「うつつわああああ！！！」

思春はすべてを受けってしまった。

仙「すべて峰打ちだ。安心しろ。」

大「勝者、仙道海」

全「わああああ！！！！」

雪「すごいじゃない。海！！！」

仙「まあ、ほんのちよつと力を出したただだよ。」

蓮「あれは、私の食らった技の人とは違うの？」

仙「ああ、なんせ国が違うからね。」

蓮「へ〜」

大「海、思春が話があるってさ。」

仙「なに？思春」

思「さつきはすまなかつた。」

仙「いや、思春もすごかったよ」

思「あの、お願いがございませぬ。」

仙「なに？」

思「私を鍛えてください。」

仙「理由とかある？」

思「はい、私は、今まで一度も負けたことがなく自分に慢心していました。しかし、今回負けて分かりました。まだまだ上がいる事に気づきました。」

仙「分かった。」

思「ありがとうございます」

蓮「あの、私もお願いしたいんだけど、いいかしら？」

仙「いいよ。」

大「よし、これで決着が付いたね。運動の後は、水浴びが一番だよ。さあ、海へ行こう！」

雪「所で、海。」

仙「なに？雪蓮」

雪「あれ、なに？」

雪蓮が指指したのは、海が乗ってきた物だった。

祭「そうそう、さっきから気になっておったっんじゃない。」

仙「あれは、キャンピングカーって言って簡単に言つと、家と車と一緒にになった物だよ。」

全「へえー」

そして、全員キャンピングカーの周りを見ていた。

仙「これに乗っていれば、一ヶ月は生活できるよ。」

暎「なんと、これだけでか？」

仙「うん。それはそうと、そろそろ海に行こうか？」

大「賛成だ」

こうして、仙道達は、海へと出発した。

2時間後・・・

大・雪「着いたー」

海に着いた。

仙「ようやく着いたな。」

祭「のう、海」

仙「なに？」

祭「水浴びに来たのは良いのじゃが、どうやって入るのだ？」

まさか、このままという訳にもいくまい。」

仙「それなら、ご心配無く！ちゃんと俺が用意してるから！」

大「本当かい？」

仙「ああ、ちゃんと、この中に入ってるよ。」

雪「なにになに？何が入ってるの？」

仙「では、ご開帳」

ガバツ！！

全「・・・・・・・・」

仙「あれ？何？この空気。」

大「えーと、海、これは？」

バッグの中に入っていたのは水着だった。

仙「これは、水着と言って俺の国じゃあ一般的物だよ。」

蓮「けど、布地が少なすぎない？」

仙「こつちの物じゃあ生地が希少な物ばかりだから。しょうがなかつたんだよ。」

蓮「でもこれは・・・」

蓮華が言い終わる前に雪蓮が入って来た。

雪「いいじゃない。私は、着るわよ。み・ず・き海の世界の物だなんて興味深いじゃない」

大「良く言った。雪蓮、私も着るよ。」

とととと大蓮に続いて手に取って行った

仙「じゃあ俺は向ここの茂みに居るから着替えたら、呼んで。」

そう言っつて俺は茂みに行った。

数分後・・・

大「海、もういいよ。」

仙「分かった。」

ガサガサ

仙「おおっ!?!」

海が茂みから出て、見るとそこには色鮮やかな水着を着た大蓮たちがいた。

そこで、海が思ったことは。

仙（こ、これは、美女の宝石箱や〜！！！！）

と内心興奮していた。

大「海、そんな所に突っ立ってないで、こっちにこい！！」

仙「応！！」

こうして心置きなく仙道達は水浴びをして帰った。

黄巾党の場所をつきとめた！！

水浴びから数週間が経ったある日、仙道達にある情報が届いた。それは、黄巾党の本隊が見つかったという事である。

仙道は大蓮たちが居る王宮に急いだ。

仙「やべえ、また、遅刻だ〜！」

そして、王宮に着いた。

仙「悪い、遅くなった。」

大「いいや、気にしなくていいよ。それじゃあ、始めようかね。」

冥「承知しました。大蓮様。では、軍議を始めよう。前に黄巾党と戦ったよな？」

仙「ああ、」

冥「あれの本隊が我が領内で見つかった」

仙「何だつて!？」

冥「詳しい情報はその竹管に記しておいた。」

仙道達は、すぐに、竹管を見た。そこには、位置と数、今の状況が記されていた。

冥「なお、数に関しては未だに不明だから、その所は、気を付ける事」

大「もし、分からない事は私か瞑琳に聞いてくれ」

冥「他に質問はないか？では、解散」

こうして俺たちは、準備を始めた

数時間後・・・

俺たちは、黄巾党の居る城に向かっていった。

仙「なあ、大蓮。」

大「何？海」

仙「実際の所、数はどのくらいなんだ？」

大「そうだね。他の諸侯も来てるから、数は相当な物だよ。」

仙「ふーん、他の諸侯って？どこが来てるの？」

冥「魏の曹操、公孫？、袁紹、後は義勇軍の劉備というのが参加している。」

仙「へえー揃ってるなーあつとあれが例の物かな？」

大「そうだね。そこで海に質問だよ。」

仙「何？」

大「私達は軍を連れて来ているけど、あまり被害は出したくないけど、手柄が欲しいどうしたらいい？」

仙「そうだなー」

軍の被害は出さずなおかつ、手柄を得るか。

海は少し考えた。

仙「他の軍に雑魚を当てて一番いい所だけ持って行くか。腹黒いな」

大「そうだね。でも、そうしないとこの世界じゃそうしないと生き残れないからね。」

そう言い合ってるうちに着いた。

すぐに、陣地を構築し軍議を行った。

軍議が終わってしばらく時間があつたので、海は散歩をしていた

仙「これからどうしようかな？」

雪「海」

仙「雪蓮？どうしたんだ？」

雪「ちよっと話しようと思ってね」

仙「話？」

雪「そう。前に蓮華と試合した時の技教えてくれない？」

仙「ああ、あれね、いいよ。」

雪「やったー？」

仙「あの技は前にも言ったけど単純に三つの剣筋を速くしたただけなんだ」

雪「分かったわ。やってみる」

仙「じゃあこの藁人形でやってみてみる」

と言って人形の前に立った

雪「はあああああ??」

ズバツ！

雪「あれ？」

仙「それじゃあ、ダメだよ。雪蓮、もっと単純に考えて三つの剣筋を速くやると言うことを考えてこ
う!!!」

ズバツ！ズバツ！ズバツ！

どサッ

雪「はへー」

仙「やってみ」

雪「分かったわ」ジャキ

「秘剣燕返し！！」

ズバツ！ズバツ！ズバツ！

雪「やったー？出来たわ海！！」

仙「おめでとう、雪蓮」

雪「これもすべて、海のおかげだわ。ありがとう。」

ガバツ！！チュ！

仙「へ！？」

海は雪蓮にキスされました。

雪「えへへ、じゃあね、海！」

仙「ちよっ雪蓮。」

雪蓮はあっという間に消えました。

仙「はあゝあれ、ファーストキスだったんだぞ」

海は項垂れていましたとさ

黄巾党の場所をつきとめた!! (後書き)

作「久々に終わった」

仙「何言ってるんだよ」

作「だって、今まで合宿だったんだもん」

仙「弱音を吐くな!!」

作「えー、ヤダヤダヤダ!!」

仙「てめえ、今すぐ殺られてえか?」ひゅっつん

作「やれるもんなら殺ってみろ!!」

仙「そうかい、じゃあ遠慮なく行かせたもらっぜ、ゲートオブバビロン」

シュザザザ

作「無駄無駄無駄!!!」

仙「何!?!」

作「今度はこっちから行くぞ」

「はあああああ?」

としばらく続いた

大「あーあこれじゃあ、暫く続くね」

雪「そうね母様じゃあ私たちで閉めましょうか？」

大「そうだね。では、」

大・雪「次回もお楽しみに」

黄巾党壊滅！！

陣地を構築して数時間後、また軍議を行った。

大「さて、これからどうするかね？」

冥「まず、敵拠点の地図をご覧になっては？」

大「そうだね。穩、地図を」

穩「はい、ここは元々、大守さんの者でしたからありますよ」

穩がそういうと、机の真ん中に地図が置かれた。

雪「典型的な城の造りね」

大「確かに、攻めにくく、守りやすい構図になっているね。」

地図では、城を中心に回りが崖と岩山によって守られている自然の要塞のように思わせる。

大「海、お前は、どう思う？」

仙「えっ？おれ？」

大「ああ、思ったことを言ってみて」

そう言われて、地図に目を落として見た。

見ると、城の周りにいろいろな建物が見てとれた。

仙「この真ん中にあるのが本丸のようなもの？」

大「そうだね」

仙「じゃあ、この周りにあるものは？」

冥「それは多分、倉庫のようなものだ」

仙「なるほど。」

俺は、少し考えて・・・

仙「閃いた!!」

雪「なつなに!?!」

仙「作戦を思いついた。」

大「どんなの？」

仙「ずばり!ど派手に一発。」

冥「それだけではわからんだろう。」

仙「ごめんごめん」

蓮「まったく。」

蓮華は呆れた。

大「して、作戦の内容は？」

仙「ああつまり、俺の技術で陽動を起こす、その後、本隊を出して制圧する。」

大「陽動を出すにしても、どうやってやるの？」

仙「それは、後でみんなに見せるよ」

雪「ここじゃできないの？」

仙「ああ、なにせ、でかいからな。」

大「分かった。それじゃあ作戦はいつごろ出す？」

仙「できれば、夜に行きたい。」

大「分かった。」

冥「他に意見はあるか？」

誰も上げなかった。

冥「では解散。」

大「海、さっき言ったものは？」

仙「みんなついてきて」

天幕からみんなが、でてきて広い所に出た

仙「ここら辺でいいかな」

そして、手を合わせて、心で思ったものを創造した。

仙「創造。」

すると、広い荒野に数台のミサイルを乗せたトラックが出てきた。

全「??？」

大「海、これは？」

仙「これは、ミサイルといって、遠距離から攻撃できる物だよ。」

全「へえ〜」

雪「これでどうするの?。」

仙「この部隊で、城の城壁をすべてぶち壊す。」

蓮「これでか?。」

仙「ああ」

大「分かった。威力は、実戦で見せてもらおう」

仙「おう。まかせとけ。後、俺は、今回前線に出ない後方にしてモ

「らえないか？」

雪「なんで？」

仙「今回は、自分の軍だけじゃない他の諸侯が来てるんだできるだけ姿を見せないようにしないと思っ
てな。」

雪「なるほどだから、時間帯も夜にしたのね。」

仙「そういうこと。」

その後は、各々の準備に入った。

そして、夜……

大「作戦開始よ。」

仙「ああ、うてー！ー！」

バシュ！！バシュ！！バシュ！！バシュ！！バシュ！！バシュ！！

?????サイド

?????「華琳様！！！」

?????「どうしたの？桂ふあ？」

桂「それが、敵拠点が攻撃されています。」

華「なんですって!?!どこの軍?」

桂「孫堅の軍のようです。」

華「それで、状況は?」

桂「圧倒的に、孫堅の方に上がっています。」

華「そう。」

私は、少し考えていた。後で会ってみようかと噂では天の身遣いが降りていると聞いていたから、

華「桂ふぁ、この戦いが終わった後、孫堅のところに行きよ。」

桂「分かりました。」

??? サイドout

俺は、できる限りの後方支援を行った。その後、手持ちの武器に変えて行っていた。因みに今、持っているのは、バレットライフルM82A1の赤外線サイトで支援している。

蓮「海、それは何?」

仙「これは、バレットライフルって言って、こっちの世界でいう弓兵のような役割だよ。」

蓮「弓兵の？」

仙「そう。これで、弓兵より数倍の距離を撃てるんだよ。」

蓮「へえ〜」

こんなことを、話してるうちにあっという間に制圧が終わった。そして、大蓮たちが、帰ってきた。

大「ただいま〜」

仙「おかえり、それで、張角たちは？」

大「それが、いなくなっていたのよ。」

仙「ふ〜ん、大方逃げたんじゃね？」

大「私もそう思う。まっこんなこと気にしてもしようがないけどね。さっさと、帰る」

準備、しちゃいましょう。」

仙「そうだな。」

そして、帰還の準備をしているときに来客が来た。

兵「失礼します！」

大「どうした？」

兵「はっ孫堅様に来客が来ています。」

大「誰？」

兵「曹操様です。」

大「分かった。通して」

兵「はっ」

数分後・・・

曹「失礼するわ」

大「いらつしやい」

曹「この度の戦は大勝利で。」

大「本当は、そんなことを言いに来たんじゃないでしょ」

曹「あら、ばれてる？ならっ率直に言うわね。天の身遣いとやらを呼んできて」

大「いいわよ。」

しばらくして、海が天幕に来た。

仙「なんだい？大蓮、疲れてて眠いんだけど」

大「ごめんなさいね。あなたにお客さんが来てるから、」

仙「この子？」

大「そう、曹操っていうの。」

仙「へえ」

この、美少女がかの有名な曹猛徳か。

仙「で俺に何の用なの？」

???「貴様へ華琳様に向かって失礼であろう。」

曹「やめなさい。春蘭」

春「はい。」

曹「部下が失礼したわね。姓は曹、名は操、字は猛徳よ」

仙「てことは、後ろにいるのが夏侯惇と夏侯淵かな？」

曹「そうよ、よくわかったわね。」

仙「なんとなくな」

曹「そう。」

曹操は海をじっくり見た。

仙「なんだ？なにか言いたそうだな。」

曹「あら、ばれてる？なら、率直にいうわね。私の元に来ない？」

夏侯惇・淵「華琳様!？」

仙「理由は？」

曹「簡単、強いものを取り込むというのが、世の常というものよ

仙「悪いが、それは無理だ」

夏「貴様ー！華琳様の誘いを断るのかー？」

と夏侯惇が攻撃してきた。

仙「よつと」

華麗にかわして攻撃した

夏「ぐはっ!?!?貴様ー!?!」

仙「俺と戦おうなんて10年早いぞ。新兵」

夏「なんだとー!?!なら、勝負だ!?!」

仙「望むところよ。というわけで、いいか曹操、大蓮。」

曹・大「いいわよ」

天幕から出て広場へと移した。

大「じゃあ、審判は私がやるから、勝敗は戦闘不能となったら、ありとする。いいかい？」

仙「わかった」

夏「はい。」

大「では、始め!!」

夏「はあああああ!!!!」

直後に夏候惇が動いた。

仙「よつと」

海が捌く、防ぐを続ける。

その行動に、夏候惇がいらいらする。

夏「どうした。攻撃してこい!!」

仙「分かったよ。それじゃあ今度はこっちの番だ」

海が攻撃する

夏「なっ速い!?!」

仙「さらさらさら!!」

夏「なっなめるな!!」

仙「そろそろ、決めるか。」

すると、海の剣が光りだした

仙「今度はな、ある騎士王が手に入れて夢を想像した技だ!!」

「アヴァロン(すべての理想郷)」

ガキンツ!!

夏「なに!?!」

仙「はああああ!!」

ザン!ザン!ザン!ザン!

「エクスカリバー!! (約束されし勝利の剣)」

夏「うあああああ!!!!」

ドサッ

仙「安心しろ。手加減はしてある。」

大「勝者、仙道海」

曹「うそ。」

仙「これが、実力の差ってやつだ。」

曹「帰るわよ。二人とも」

二人「はっ」

そうして、彼女らは自分の陣地に帰って行った

大「お疲れ様。海」

仙「ああ」

大「彼女も満足したかな？」

仙「どうだろうね、でも、あきらめてはいないと思うよ。」

大「どうして？」

仙「帰り際にこっちを見てただろう。そう思った。」

大「ふーん」

仙「さて、終わったことだし寝るか。」

大「何言ってるの。海、これから、付き合ってもらおうよ。」

仙「えー！？マジで！？」

大「因みに拒否権はないから。」

仙「はあ〜〜わかったよ」

大「うふふふふふふ、それでこそ海ね！」

その後、夜明けまで二人は飲んでいたとき

そうだ、鍛錬をしよう！

黄巾党が壊滅してから数ヶ月経ったある日の事、海は昼飯を食った後、午後から休みなので、鍛錬をしようと思い中庭に来ていた。

仙「ここ最近、鍛錬、してなかったからなー昔の感覚忘れてなけりやいいけど、」

実は、海の実家は武家屋敷のような物で、ほぼ、全ての武術を取り込んでいる凄い家系なのだ！

仙「おい、作者、紹介の時に何故言わない。」

だって、そっちの方が面白いと思ってね。

仙「あっそ」

そう、作者に言いながら、中庭に向かった。すると・・・

ガキン！！

仙「んっ？」

中庭の方から金属のぶつかる音が聞こえてきた。

見てみると、蓮華と思春が鍛錬をしていた。

蓮「はあああああ??？」

ヒュン！！

思「ふっ」

タンッ！ヒュッ

仙「うーむ」

蓮華の攻撃は相手を倒すというよりは、舞に近い物である

対する思春はスピードを生かした一撃必殺と言う物だと俺は思った

思「そんな単調な攻撃では、相手を倒せませんよ蓮華様。」

蓮「言わせてはおけぬ！！」

ヒュン！！ヒュン！！タンッ！タンッ！

蓮「思春、避けてないで攻撃して来い！！」

思「分かりました。思春、参ります。」

タンッ！ヒュン！！

蓮「くっ？」

思春の攻撃が始まり、そして・・・

蓮「きゃっ！！！！」

ガキン！！ひゅんひゅん

刀がふきとばされ俺の方に？

仙「白刃取り！！」

ぱしっ！！

蓮「海！？」

思「師匠！？」

仙「ふう〜危なかった」

蓮「どうしてここに？」

仙「久々に鍛錬しようと思ってね」

思「師匠でも鍛錬はなさるのですか」

仙「ああ、俺の世界のだけだな」

蓮「そういえば、海の家系ってどんなの？」

仙「家の家系は代々武術などを取り入れた家系なんだ」

思「例えばどんなのがあるのですか？」

仙「そうだな〜こつちの世界でいう氣なんかも扱えたよ」

二人「へ〜」

仙「今からやるうと思うんだけど見ていく？」

二人「見たい（です）」

仙「なら、その木陰にいてね。」

すると、海は中庭の真ん中にたって集中し始めた。

仙「はあああああ！！！！！！」

気がどんどん高まっていきやがて、掌に集めだした。そして・

仙「（向こうにある岩が標的としてそこに撃つ！）」

「神威！！！！」

ヒュン！！バスッ！

「破壊！！！！」

ドカーン！！

岩は一瞬にして粉々になった

二人「ぽかーん」

仙「どうだった？」

蓮「すごいとしか言いようがないわ」

思「まったくです」

仙「じゃあ今度は、二人の相手をしてあげようか？」

二人「お願いします!!」

仙「二人同時にかかってきな、本気でな」

二人「はい!!」

そして、まず動いたのが思春だった

思「はああああ!!」

仙「甘い!!」

ガキン!!ドカツ!

思「ぐは!!!??」

蓮「今度はこつちよ。はああああ!!」

ヒュン!!

仙「おっと」

ザッ

蓮「何!？」

仙「俺の技をみせてやる！」

「天の舞い！」

シユン!!

蓮「きゃあああ!!！」

ドカーン!!

あっという間に終わってしまった。

仙「さて、二人の悪い所は、まず、思春だが、隠密性にはできるが、打数が少なすぎるからそこを、気をつけた方がいい」

思「はい」

仙「次に蓮華だが、君のはどちらかというところ、舞いに近い感じがする。もつと、攻撃性を高めた方がいい」

蓮「はい」

二人とも落ち込んでいた

仙「二人ともそんなに落ち込むなって確かに今回は負けたかもしれないが、今、言われたことをしっかり」

守ればきつと強くなる」

二人「はい!!」

二人の眼に輝きが出ていた

仙「それでは、今回の鍛錬は終わりとする。」

二人「はい、ありがとうございます。」

仙「二人とも疲れただろう。甘いものを食って休むといい」

そう言って差し出したのがチョコだった。

蓮「海、これは?」

仙「それは、チョコっていつて俺の国の人気のある食べ物なんだ」

蓮「へえ」

仙「食べてみてよ。」

蓮「わかったわ」はむっ

思はむっ

仙「どっ?」

二人「甘い」

思「天の国にはこんな甘いものがあるのですか？」

仙「ああ、俺の世界じゃあ子供たちに人気があつたな。」

二人「へへ」

仙「それじゃ、俺はもういっちょやりますかね」

そういって、的を出した

蓮「今度は何をやるの？」

仙「射撃をやるうと思つてね」

思「射撃？」

仙「えっと、こっちでいう遠的のようなものだよ」

二人「へへ」

そういって、海は、サムライエッジを出した

仙「いくぞ」

ダンダンダンダン

すべての弾を撃ち尽くして的看着ると、すべてが中心にはいつていた

仙「ふむ、こんなとことか」

蓮「やっぱりすごいわね、海って」

思「ええ」

二人は、見惚れていた

仙「射撃の方も十分だし今日はこれで、終わりにするかな二人ともご飯まだでしょ

一緒に食わないか？」

蓮「それは、いいわね。思春もどう？」

思「お供させていただきます。」

こうして、鍛錬は終了したのである。

反董卓連合の参加する？しない？

ある日の事、武将が全員集められていた。

仙「どうしたんだ？大蓮、急に集めて」

大「今から説明するよ。さっき届いた物だけど、阿進大將軍が十常侍によって暗殺された。」

雪「なんですって！？」

大「その後、董卓という奴が洛陽の太守になった」

仙「やっぱりな」

蓮「やっぱりって海は知っていたの？」

仙「ああ、これは俺の国の知識だけだな」

大「なら、海はこの後、どうなるか知っているんだね？」

仙「ああ、これにより反董卓連合が結成される。そして、その首謀者は、袁紹と袁術だ」

大「確かに、そのとおりだよ。手紙に書かれているとおりだよ。で海はどう思う？」

仙「俺の世界の董卓は、悪逆非道で有名なんだけど、こっちの董卓はどうだか分からない。だから、参加

するべきだと思つ。どうだろう？」

大「私もそう思う、昔、董卓の治めてる国に行った事があるけど、民も活気があつて、悪逆非道とは、程遠いもんだつたよ。皆はどう思う？」

雪「私は、まだ解らない。なら、この目でたしかめるまで」

蓮「私もそう思います。」

つと賛成の声があがつた

大「よし、決まりだ早速準備をしな。」

全「はい？（応！）」

そして、準備が始められていた。

袁家〓馬鹿 これ鉄則

呉軍の準備が終わり、洛陽に向けて軍を進める。仙道達、その道
中にて・・・

大「ねえ、海。」

仙「ん？なんだ大蓮」

大「しばらく暇だからさ、何かお話ししようよ。」

仙「話？話ってたって、なに話すのさ」

大「いろいろ」

仙「いろいろって」

大「そうね、あつ海の世界の話をしてよ」

仙「俺の世界？」

大「うん」

仙「そうだな。何から話そうか。」

大「じゃあ、まず、海は向こうではどんな生活してたの？」

仙「そうだな。俺くらいの年はまだ、学校に通っていてな」

大「学校？」

仙「そう。簡単にいうと、若い連中が一つの所に集まって勉強するところだよ」

大「それって、私塾のようなもの？」

仙「いや、ちがう。学校は国が経営するところなんだ」

大「へー国が。」

仙「そう。だから、大体、俺くらいの歳だと通うんだよ」

大「うちにも入れてみようかしら？」

仙「入れてみたら？結果はどうあれいい人材が出てくるかもよ？」

大「じゃあ次、娯楽とかはあったの？」

仙「もちろん、いっぱいあったよ」

大「どんな、どんな？」

仙「そうだな。ゲーセン、サバゲー、カラオケとかその他諸々」

大「へー向こうの世界っていろいろあるわね。特にサバゲーってのが興味あるわ。」

仙「おおっ！！この世界でもサバゲーの分かる人がいるなんて感激だ！！！！」

海は、興奮していた

大「ええ。」

大蓮は若干引き気味だった

大「因みにサバゲーってどんなの？」

仙「ん？ああ、サバゲーっていうのは、戦争の模擬戦を考えてくれれば分かりやすいと思う」

大「模擬戦の？」

仙「ああ、人数は10対10とか結構大人数でやるんだけど銃を使ってる遊びなんだ」

大「へー」

仙「でな、その遊びだがな・・・」

海のサバゲーに対する思いをぶちまけている間に目的地に着いてしまった。

仙「おお、壮観だな。」

大「確かに、これだけいれば驚くのも無理はないわね」

海たちの先には多くの兵士たちが陣を構築しているのであった

兵「遠くからお疲れ様です！！軍の名前と兵力数を教えてください！！」

大「孫呉の軍よ。人数は7万」

兵「分かりました！！では、陣地の方に案内しますので付いてきてください。」

大「分かったわ」

しばらく、歩いたところで陣を構築した。

（天幕内）

仙「暇だな」

雪「海、いる？」

仙「おう、雪蓮がいるぞ」

天幕内に雪蓮がはいつてきた。

仙「どうした？」

雪「これから、軍議あるみたいなんだけど、母様が呼んで来いって」

仙「分かったすぐ行くよ」

陣地内

大「海よく来たね」

仙「一応、気になったからね。他の諸侯が」

大「でも、大体は分かっているのだろうか？」

仙「まあな」

そう話してるうちに一番でかい天幕に着いた

仙「ここ？」

大「そうだよ。入るぞ」

仙「ああ」

天幕に入った瞬間、甲高い笑い声が聞こえてきた

??「お〜ほっほっほっほっほ」

その方向を向くと金髪でドリル頭が目についた

仙「ドリル・・・」

大「どりる？」

仙「いや、なんでもない」

そう言いつつ席に着いた

??「さて、皆さんまずは自己紹介でもしましょうか。では、そのくるくる頭から」

??「うるさいわね。どっかのおばさんが遠吠えでもしてるのかしら?」

??「なんですって!?!」

??「おいおい、今は喧嘩してる場合じゃないだろう」

??「そうでしたわね、地味な白蓮さんの言つとおりですわ。」

白蓮?「だから、なんでいつも一言多いんだよ」

??「まあいいわ。曹操よ。よろしく」

??「公孫讚だ。」

??「西涼の馬騰よ。」

??「平原の劉備です」

大「孫呉の孫堅だ。そして、こっちが」

仙「同じく、仙道海だ。」

??「孫堅さん、誰ですの?このブ男は」

そういわれて、海は反発しそうになったがなんとか堪えた

大「最近、わたしが気に入っている子だよ。それより自分の名前を言ったらどうなんだい？」

??「あら、そうでしたわね。この私、わ・た・く・しの名前を言っておりませんでしたわね」

曹「早く、言いなさいよ」

??「言われなくても分かっていますわ。私の名前は、袁、本初ですわ。おーほっほっほっほっほ」

??「同じく、袁術じゃ」

公「いいから、さつさと進めろよ」

袁「うるさいですわよ。伯珪さん。では、これより軍議を行います。まず、総大将を決めますが、誰が、だ・れ・が一番ふさわしいと思いますか？」

あきらかに、自分がやりたいというオーラ出してるじゃねえかと内心思う海であった

曹「麗羽がやればいいんじゃない？」

袁「あら、そんなに私のことをおしえてくださるのですか？なら、仕方ないですわね。私が仕方なくし・か・た・な・くやって差し上げますわ。おーほっほっほっほ」

大「なら、決まりだな作戦は後ほど伝えてくれればよい出るぞ。海」

仙「応」

そうして、天幕から出た

仙「袁家って絶対馬鹿だろ」

大「そういうところは昔から治らないんだよねあの子は」

仙「あゝ無性に腹が立ってきた大蓮ちよっと、その辺散歩してくるわ」

大「分かったよ。半刻ほどで戻っておいで」

仙「分かった」

海は散歩に向かった

旧友との再会&同盟

俺はしばらく散歩して陣地に戻った

それと同時に、袁紹から作戦の通知が届いたので
軍議を開く事にした

仙「袁紹から作戦の通知が来たんだって？」

冥「ああ、」

と答えた瞑琳だが、妙に神妙な顔をしていた

仙「どうした？」

冥「袁紹からの作戦書だが、あれを作戦と呼ぶには軍師のプライド
が許さん」

雪「そんなにひどいの？」

大「とりあえず、読んでみな」

冥「分かりました。」

と言って持っていた紙を広げた

冥「では読みます」

「雄々しく華麗に前進せよ」

全「……………」

その事を聞いた瞬間皆時が止まった様に動かなくなった

仙「選択、間違えたんじゃないの？」

大「ま、まあ言い換えればこれは、転機じゃないか」

雪「どう言う事？」

大「つまり、自由にやっていいと言う事だろ」

仙「なるほど」

俺は少し考えて言った

仙「なあ、冥琳」

冥「なんだ？仙道」

仙「先鋒は何処の軍なんだ？」

冥「劉備の軍だ」

仙「そうか」

大「どうしたんだ？海」

仙「いや、劉備軍はこの中じゃあ一番貧相なんだ。」

雪「それが、どうしたの？」

仙「だから、ここで何かしらの恩を売っておけば後々役に立つかな？って

おもってさ」

大「なら、同盟でも組めば良いんじゃない？」

仙「なるほど、それなら行けるな」

大「でしょ。他に意見はあるか？」

雪「大丈夫でしょ。」

大「よし、決まりだな。誰かある！」

兵「はっなんでしよう？」

大「今から書状を書くそれを劉備軍に届けて欲しい」

兵「分かりました！」

サラサラ……（手紙を書く音）

大「よし、これで良いな。では、頼む」

兵「お任せ下さい」

大「しばらく待ってみて、それから行く事にしよう誰か行きたい人

はいる？」

仙「俺は行くぜ」

雪「私も！」

大「他に居るか？じゃあ、海と雪蓮で決まりだね。他は待機ね」

それから、数十分後、俺たちは劉備の陣地に向かった

????「待て！貴様らは何者だ？なぜ、我らの陣に入る」

雪「黙りなさいこちらにいるのは、孫呉の主孫堅様だぞ」

????「孫堅？ああ、さつき書状を送ってきた方ですね。ご無礼をお許してください」

大「かまわないよ。所で名は？」

????「はっ姓は関、名は羽、字は雲長です。」

大「分かったわ。劉備ちゃんに会わせてくれる？」

関「はっこちらへどうぞ」

こうして、関羽の案内で劉備のいる天幕に着いた

劉「初めまして孫堅さん」

大「初めまして劉備ちゃん」

劉「立ち話もなんですし奥へどうぞ」

大「邪魔するわ」

天幕内に入ると数人の仲間と白い服を着た男性がいた

仙「あれ？一刀？」

一刀「え？もしかして、海？」

仙「おおっ一刀じゃんか久しぶり」

一「久しぶり〜何年振りだ？」

仙「10年くらいかな？」

一「そうか〜でもお前もあんまり変わってねえよな」

仙「お前こそ」

二人「あははははは」

今、海が話している男性は、北郷一刀、聖フランチェスカの学生で
仙道の幼馴染である

海と同じ軍事マニアである

大「海、その子は？」

仙「ああ、紹介するね。こいつは北郷一刀。俺の幼馴染だ」

一「初めまして孫堅さん。北郷一刀です」

大「よろしくね」

仙「なあ、大蓮ちょっと、一刀と話してきていいか？」

大「いいわよ。こっちで片づけちゃうから」

仙「悪い」

劉「それで、孫堅さん今日はどっいった内容で？」

大「ええ、劉備、あなた先鋒を任されたんですって？」

劉「はい、でも家は兵数も兵糧も少なくてもうしようもないんです」

大「だったら、私たちが手伝ってあげましょうか？」

劉「本当ですか!？」

大「ええ、ただし条件があるの」

劉「なんですか？」

大「私と同盟を組んでほしいの」

劉「もちろんいいですよ。」

とこんな話をしている頃、海たちは

仙「お前が引越してからずっと暇だったんだぞ」

一「悪いな、俺だって暇だったんだから」

仙「所でお前は、なんでこの世界に？」

一「実は、ここに来る前事故にあってさ、病院に行っただけぞ
ここで、死んじゃったんだ」

仙「もしかして、お前、その後神とやらに会ったか？」

一「おお！なんで、分かるんだ？」

仙「はあ〜」

海は頂垂れた

一「海？」

仙「実は、俺も死んでからそいつに会った」

一「マジで！？」

仙「ああ、ついでに力ももらった」

一「どんな？」

仙「こんなの」「ひゅん

—「おお!？」

仙「どうだ？」

—「すごいな、セントウロが出てきた」

セントウロ「イタリア軍の砲台付きの装甲車

仙「これの他にもいろんなのが出せるぞ」

—「すっげー!マニアにとっちゃいいもんもらってんじゃん!」

仙「そういうお前は？」

—「俺のは戦闘能力が上がったぐらいだからな」

仙「どんなふうにな？」

—「バ〇オのウ。スカー並みに」

仙「え、チートじゃん」

—「何言ってるんだよ。お前の方が十分チートじゃん」

仙「それもそうか」

二人「あはははははは」

と、話していると大蓮に呼ばれた

大「海、そろそろ行くぞ」

仙「応」

一「あつ孫堅さん」

大「あつ二人には言ってなかったね。今日から私たちは仲間だから」

一「どういうことですか？」

大「私たちは桃香と同盟したから」

仙「うまくいったんだな」

大「ええ、だからこれからは私のことは大蓮と呼んでいいわよ」

一「いいんですか？」

大「だって、海の幼馴染なんですよ。それなら信用できるじゃない」

一「はあ」

仙「いいからもらっとけよ一刀」

一「分かりました。大蓮さん俺のことも一刀って呼んでください」

大「ええ、そうするわ。じゃあそろそろ行くところか、海」

仙「分かった。じゃあ一刀また後で」

「心」

こうして俺は、一刀と別れ陣地に戻った

旧友との再会&同盟(後書き)

作「やっと、できた」

仙「あいかわらず遅いな」

祭「まったくじゃ」

作「いいじゃん、幼馴染の一刀くんにも会えたんだから」

仙「まあな」

祭「所で、海」

仙「なに？祭」

祭「一刀は強いのかの？」

仙「まあ強いとは思っよ」

祭「お前よりもか？」

仙「どうだろ、分かんない」

作「はいそこ、ストップこれ以上のネタばれはだめだよちゃんと次回に出す予定なんだから」

仙「今、言っても大丈夫だろう」

作「駄目なものは駄目なの!!」

仙「分かった分かった。言ったッラネタがなくなるもんな」

作「そのとおり!!」

祭「もうすこし、考えたらどうなんじゃ?」

作「分かってるよ」

仙「そんなことよりコールやるぞ」

作・祭・仙「次回もお楽しみに」

作「ついでに一刀も戦闘に参加するかもね」

ここで再度主人公設定（前書き）

すいません、追加設定です

ここで再度主人公設定

本文

仙道の能力設定（FATE風に書きます）

気力：MAX 俊敏：MAX

防御力：MAX 体力：MAX

索敵能力：MAX 銃スキル：神

アニメ技・オリジナルも可

創造・想像

この能力は、仙道が思った武器や、車両が、作り出せるというチート的なものである。

また、現代世界の軍隊も作り出せることができる。

（コスト制がかかっている：例；戦車は4台までなど）

王の宝物庫

この宝物庫は、無限に物を入れることができました、すべての物（食糧から日用品はたまた、危険物など）が入っている。

逆鱗

仙道は普段、優しい奴だが、本気で怒ったときは手が付けられなくなる。また、嫌いな奴なら、徹底的にぶちのめした後、拷問という名の説教を始める。

また、仙道は銃のスキルが半端ないので、早打ちでもだれも勝てないほどの力がある。

銃の種類とスキル

ハンドガン：S

アサルトライフル：A

スナイパーライフル：S
ロケットランチャー：B
その他：A
乗り物の操作スキル
一般車両：A
軍用車両：S
船：A
飛行機械：S

？水関（しすいかん）の戦い

桃華達と同盟を結んでから一日が過ぎていよいよ？水関しすいかんの戦いが幕を開いた。

仙「なあ、大蓮」

大「なんだい？海」

仙「？水関しすいかんの将は誰なんだ？」

大「ああ、華雄と張遼だよ」

雪「あれ？華雄ってたしか、母様がコテンパンにしたんじゃない？」

仙「そうなの？」

大「ああ、たしか小さな戦いの時だったけなあ。あの時は、あやつ部下が暴走して陣が崩れた所をあたしが、突いたんだよ。でも、個人の武としては強い方だよ、そして、それを誉れとしている」

仙「なるほど」

雪「海、どうしたの？」

仙「いや、ちよつとな、」

大「なんだい、言ってみな」

仙「じゃあ、大蓮と雪蓮に質問、武に対しては名誉な物にしてる?」

大「そりゃあもちろんだよ。」

雪「私たち武人が自分の武を誉れとしているのは当然のことよ」

仙「だったら、話が早い。華雄は武に対して一番敏感なはずだ。そこを突くのさ」

雪「どういうこと?」

仙「例えば、侮辱などを掛ければ・・・」

大「なるほど、向こうから出てくるように仕向けるのか」

仙「そのとおり」

雪「じゃあ、その作戦で行きましようか、どう?冥琳」

冥「いけるな。大蓮様、ここは仙道の作戦で行きましよう」

大「よし、行くのはいいとして、誰がやる?」

仙「ここは、俺と一刀で行かせてくれないか?」

大「理由は?」

仙「身遣いという訳のわからない物に侮辱されてたらいってもたつてもいられないだろう」

大「なるほど、よし、分かった。」

仙「いつも悪いな」

大「そう言っな。海」

冥「そうだぞ。それに、お前の作戦はとても効率がよく運用しやすい。やはり軍師に向いてるのではないか？」

仙「俺が軍師？よしてくれよ、そんなのに俺はなりきれないよ」

大「まあ、海はどちらかというと体を動かす方が好きだろう」

仙「そうだな」

雪「それより、さっさとおこなっちゃいませよ」

大「それも、そうだな。桃香達に今のこと伝えておいてくれよ」

仙「分かった」

そして、俺は、一刀のいる桃華達の陣に来た

愛「これは、海殿。どうされました？」

仙「こっちの作戦ができたからね桃香達にも伝えてもし、いいなら実行しようと思ってね」

愛「分かりました。では、案内しますね。」

愛沙に案内され天幕に着いた

仙「桃香、いるか？」

桃「はい？あつ海さん」

—「どうした？海」

仙「ちょっと作戦を思いついたからなそれを聞いてもらおうかなって思ってたさ」

桃「作戦？」

仙「ああ、」

—「聞かせてくれ」

そして、さっきのことを話した

桃「それって危険だよ！」

—「待て、桃香。海の言うことにも一理ある」

桃「でも」

—「大丈夫だってこつちには海がいるんだしそれに、久しぶりに海とチームが組めるしな」

仙「おお、そうだな」

大「ちーむ？」

仙「ああ、チームって言うのは、団体って言う意味だよ。一刀と俺は一緒に大会に出ていてな結構優勝したりもしていた」

蓮「へえ〜」

そう海と一刀は現代世界では多くの大会で優勝しておりサバゲーでは多くのサバゲーマーに恐れられていた

大「それじゃあ、安心だね。海、絶対に帰って来るんだよ」

仙「まかせとけて」

桃「ご主人様も絶対帰って来てね」

一「もちろんだよ桃香俺はまだ此处では終われないからな」

皆の声援を受けて海と一刀は天幕から出て？水関へ向かった

？水関の城壁には二人の人物が立っていた。華雄と張遼である

張「華雄つちそつちはどうや？」

華「ああ、静かなものだ。早く戦ってみたい物だな」

張「あほか、あんたは」

華「なに!?!」

張「ええか、今回は防衛戦やこの?水関に籠って連合の兵糧が尽きたらうちの勝ちやそう賈?つちが言つてたやろ」

華「そんな小賢しい真似は相に合わんさつさと打って出るべきだ」

張「だから、あんたはアホ言つてんのやええからここに留まつときええな?」

華「ふん!」

張「はあ」

張遼は溜息を吐いたとその時

兵「失礼します!」

張「どうした?」

兵「はつ門の前に敵の武将らしき人物が出てきており兵士を数名連れて来ております」

張「どうせ挑発類のやつやろ無視しとき」

でもどんな武将か気になっていたので城壁から覗いていた

門の前・・・

俺たちは数名の部下を連れて門の前に来た

仙「さて、どうやって挑発するかな？一刀はなにかある？」

一「そうだな」

一刀は考えた

一「よし！これなんかどうだ？」

仙「どんな？」

・・・説明中・・・

仙「おーい猛将華雄」

華「なんだ！」

仙「あんた、物凄く強いんだってな」

華「ああ、私の武勇は三国一だ」

仙「それで呉の孫堅に負けといてか？」

華「何だと!？」

仙「それで三国一だって言われても実感わかないつーのまだ、張遼の方がマシだって」

華「貴様ー！！」

張「だー待て待て、相手の挑発や乗るなや」

華「黙れ！張遼、あんな風に言われては我が武がないてしまつ」

華雄は怒りの頂点にたっていた

仙「あ、そうそうもつひとつあだ名があつたな。確か猪華雄だったか」

華「もう許さん！そこで待っておれ」

華雄は準備を始めた

仙「さて、一刀は張遼の相手をしてくれ」

ー「分かった」

ギギギ（門が開く音）

華「皆の物行くぞ！我が華雄隊の恐ろしさ連合の奴らに教えてやれ！」

兵「応！」

華雄の部隊は突撃を始めた

兵「張遼様！どうしますか？」

張「ウチらは、虎牢関ころうかんに引くで」

兵「しかし、華雄様は」

張「あの猪は諦めや、とつとと引くで」

兵「分かりました」

こうして、張遼隊は虎牢関ころうかんに引いて行つた

仙「おーっと華雄、此处から先へは行かせねえぜ」

華「ふん、貴様がさつき私に言つて来た者はどんな猛者かと思えば
軟弱そうな男ではないか」

仙「何だと、てめえ」

華「大体、貴様一人でこの私に勝てるものか」

ブチッ

海の中で何かが切れる音がした

一「はっ!?!」

兵「どうしました?一刀様」

一「いや、今海の奴が切れたんじゃないかねえかと思つてな」

兵「海様ですか？とてもそつは見えませんが」

一「あいつが、切れた時は近づきたくないからなせいせい200mは」

兵「はあ」

兵2「報告します！」

一「どうした？」

兵2「はっ華雄と海様が戦闘を開始しました」

一「そうか、よし我々はこのまま待機だ」

兵「分かりました！」

その頃海は……

仙「はあああああ！！！！」

ガキンッ！！

華「くっ！」

仙「ほらほら、どうした？三國一はこの程度か？」

華「くっ舐めるなー？」

ブオン！

仙「おっと」

海は距離を取った

仙「キメるか」

海は刀を中段に構えた

仙「これはある隊長が覚悟を決めてやった技だ！とくと味わえ」

すると、刀が光出した

華「なんだ！これは？」

仙「はあああああ！！！！」

「絶・対・正・義 天下無双！！」

と叫んだ後、刀から一直線の光が華雄に向かって行った

華「うわー！？」

どっかーん

仙「正義は必ず勝つ！！」

と叫んだ

その後、？水関しすいかんは陥落した

そして、華雄は海に捕まった

こうして？水関しずいかんの戦いは終了した

？水関（しすいかん）の戦い（後書き）

作「無事に終わりました」

仙「やつとか」

作「今回は一番文字数があるよ」

仙「これぐらい書いてもらいたいものだがな」

作「それは、無理」

仙「何故だ？」

作「そこまで思いつかない」

仙「ほう？」「ガシヤ

作「何故構える！？」

仙「いや、お仕置が必要かと思ってね」

作「だから、おれの文才の能力知ってるだろ？」

仙「それもそうか」

作「そうだよじゃっ次いってみよー」

二人「次回もお楽しみにー！！」

畢雄を仲間にしよう！(前書き)

今回は短めです

華雄を仲間しよう！

？水関すいかんの戦いが終わって連合は休息を入れていた

そこで、俺は大蓮にある事を頼みに来た

仙「よう、大蓮」

大「どうしたの？海」

仙「ちょっと頼みたい事があってな」

大「良いわよ」

仙「ちょ、早！？俺はまだ、何も言っていないぞ！？」

大「華雄のことですよ」

仙「よく分かったな」

大「貴方が無闇に人を殺す人じゃないっていうのは解ってるつもりだけだね」

仙「ちゃんと見定めて決めるけどな華雄が今後どういう働きを見せてくれるか見てみたいんだ」

大「ふーん」

仙「なんだ？」

大「いや、夫に似ていると思っ
てないや、似ているって
も雰囲気
な」

仙「えっ!？」

大「どうしてそんなに驚く
の?もしかして、私じゃ
嫌?」

仙「嫌とかじゃなくって俺
なんかが大蓮とつり合
わないっていうか
こんなにも綺麗な人と
一緒に過ごした
事無かつたから」

海はさりげなくすごい事
を言っていた

大「ちよっ／／海、そんな
事言わないでよ／／」

仙「ああ、ごめん」

二人とも顔が真っ赤であ
った

仙「と、兎に角華雄の事
を任せてくれて良いよ
な?」

大「え、ええ」

仙「それじゃあ、行って
くるわ」

大「解つたわ」

海が天幕を出て行った

大「すごく綺麗か・・・ウフフf^|^」

大蓮は満更でも無さそうだ

海は華雄が捕まっている天幕に来た

仙「よう」

華「貴様は!？」

仙「華雄に話があつてな」

華「話？」

仙「ああ、俺らの仲間にならないか？」

華「何を言っているのだ捕虜にそんな話をするのか」

仙「ああ、俺は華雄が有能だと思ったから持ち込んだんだよ」

華「私が有能？」

仙「ああ、部下があんなにもあんたを庇っていたら信頼性が見えてくる。」

実は此処に来る前に海は華雄の部下の所に行っていた

華「そうか、あやつらが」

仙「基本的に俺は仲間を大事に思ってる奴は良い奴だと思ってる

そこで、お前にある言葉を送ろう」

華「なんだ？」

仙「戦友だ」

華「戦友……」

仙「戦友とは自分が認めた奴にしか呼ばせない言葉だ」

華「ふっそうか、よし、分かった」

華は吹っ切れたように言う

華「この華雄、何処までも貴方について行きましょう
真名は潜」

仙「そうか、ありがとう潜」

こうして、新たな仲間華雄こと潜が陣営に入った

華雄を仲間にしよう！（後書き）

作「今回も終わった」

仙「良かったな」

作「あれ？今回はお咎めなし？」

仙「ああ、新たな仲間が入ったしな」

作「だって、華雄、原作だと可哀想な立場なんだもん」

仙「確かに」

作「だろ？」

潜「こらー！！誰が影薄いだと〜？？」

二人「げえ、華雄！？にげろー！！」

潜「待て〜」

蓮「全く二人とも何をしてるのかしら」

雪「本当よね〜とりあえず、予告しちゃいましょ蓮華」

蓮「分かりました」

雪・蓮「次回もお楽しみに〜！！」

虎牢関（ころうかん）の戦い

俺たちは次の難門が控えている虎牢関だ

ころうかん

仙「次は虎牢関か」

大「そうね、此処には誰が控えているんだい冥琳」

冥「はい、呂布と張遼です」

仙「呂布か」

呂布といえば三国志の中で最も強いと謳われる

史実だと劉備と関羽、張飛が3人がかりでも倒せない程だ
こつちの世界でも強いのかな？と考えていた海であった

仙「そういえば、先鋒は誰なんだ？」

大「今度は曹操と袁紹だよ」

仙「ふーん」

冥「どうしたのだ？海」

仙「いや、曹操ならともかく袁紹ってちゃんと指揮出来るのかな？
って思ったから」

冥「正直、出来ないと思う」

仙「だよなーあんなお嬢様気取りが出来るわけないよなー」

と話してた

袁「はつくしよん！！」

文「あれー？姫、風邪ですか？」

袁「馬鹿おっしやい私が風邪など引くものですかきつと誰かが素晴らしい噂を立ててくれてるのですわお

ーほっほっほ

と馬鹿にされていることも分からなかった

しばらくして虎牢関についた

大「さて、あたし達は後方から見物しようじゃないか」

雪「でも、母様曹操ならともかく袁紹はあつという間に終わってしまっくんじゃない？なんせ相手はあの飛將軍の呂布よ」

大「確かにそうだね、そこで、私たちは桃香の軍と一緒に援護の方に回る。中核は海と一刀でやってもらいたい」

海・ー「分かった」

大「他に意見はあるかい？」

・・・

大「ないね、じゃあ解散！」

そして、海と一刀は天幕を出た

仙「一刀」

一「なんだ？」

仙「お前、武器は持ってるのか？」

一「刀ぐらいしかないな」

仙「じゃあほれ」

ポイ！

一「こ、これは！？」

一見、普通のハンドガンだが、横にSTARSのロゴが入っていた

仙「ああ、お前が使いそうなのを出した後、少し改良したからな」

一「悪いな、しっかしまさかこれを持てる時が来るとわね」

仙「お前、いつつバイオやるときこれ使ってたもんなー」

一「試し撃ちしていいか？」

仙「ああ、そう言いつと思ってあそこに廃車を出しといた」

「「よし、いくぞ」

カチャ、ドン！ドン！ドン！

仙「相変わらず良い腕してるな」

「「引越してからも、これだけはやってたからな」

仙「どうだ、撃ってみて」

「「悪くない、むしろ満点だ！」

仙「そうか、良かった」

ジャーンジャーンジャーン

仙「お？そろそろいくか？」

「「そうだな」

そうして海と一刀は虎牢関に向かって歩き出した

虎牢関（ころうかん）の戦い（後書き）

作「第23話終わり」

仙「遅い！」

作「今回はすみません」

仙「えらく素直じゃないか」

作「だって、書きたいとは思ってたんだよ？でもいいネタが上からなくてな」

仙「そうか、それじゃあ仕方ないな」

作「次回は戦ってもらうからな」

仙「応！まかせとけて」

作「呂布相手だけど」

仙「！？」

作「次回もお楽しみに！！」

仙「おま、ちょっと待て」

・・・

虎牢関（ころうかん）の戦い2

袁「おーほっほっほ、みなさん華麗に進撃なさい！」

兵「応！」

曹「我が兵たちよ我ら魏の力存分に振るうがいい！」

兵「応！」

と袁紹軍と曹操軍が虎牢関に向けて攻撃を開始した

仙「おーおー派手にやってるね」

一「そうだな」

俺と一刀は全体が見渡せる場所に来ていた

仙「さて、どうやって援護するか」

一「しばらくは、ここで待機、呂布と張遼が虎牢関から出てきたら即戦闘に介入するってのはどうだ？」

仙「いいね、それでいい」

（虎牢関の中）

呂「……ねね」

ね「こじこじいますぞー！」

呂「出る」

ね「はいですぞー」

張「呂布ちゃんも出るか、なら、うちらも出るでー！」

兵「応！」

ギギギギギ（扉の開く音）

夏「華琳さまー！扉が開きました！」

曹「よし、全軍突撃ー！」

兵「おおおおー！！」

袁「私たちも負けていられませんか、顔良さん！」

顔「はい！では、兵士の皆さん突撃してくださいー！」

兵「応！」

く崖の上

仙「扉が開いたぞ」

ー「俺たちも行くか」

仙「ああ、」

そして、俺たちはハマーに乗って一気に虎牢関に近づいた

虎牢関の中

兵「うぎゃあ！」

兵2「助けてくれ！」

呂「・・・弱い」

文「おーと待ちな！ここはこの文醜様が相手をするよ」

呂「・・・来い」

文「おらー！！」

ガキン！ガキン！

呂「・・・お前も弱い」

文「くっ（このままじゃやばい）」

呂「・・・これで終わり」

ブォン！！

文「これで、終わりかごめんな斗詩」

？「そうは問屋が卸さないぜ」

ガキン！

文「あっあなたは！？」

呂「・・・誰？」

？「仙道海、ここに見参！！」

呂「おまえ、弱くない？」

仙「ここは、俺に任せて行け！」

文「で、でも」

仙「いいから！」

文「わ、分かった」

仙「さて、三國一の力見せてもらいましょつか」

呂「強い？」

仙「それは、見てからにしようか」

くその頃一刀はく

ー「あんたが、張遼か」

張「せや、あんたは劉備の所の身遣いか」

—「ああ、そうだ」

張「ふーん、身遣い様がどんなものか試させてもらっついで」

ブオン！

—「ふっ」

シュタ

張「なに！？」

—「ダメだな、全然ダメだな」

張「うちの斬撃をよけるとはやるやないの」

—「今度はこっちから行くぞ」

シュツ

張「な！？」

—「ふん！」

ガキン！ガキン！ガキン！

張「はあ、はあ、はあ、はあ、」

—「終わりだ」

とそう言うと一刀は抜刀の構えになった

—「はあ！」

張「なっ！？速い！」

ドカツ！

張「うっ」「ドサツ！」

—「峯打ちだ、安心しな」

—「一刀の勝ちという形で終わった」

虎牢関(こらうかん)の戦い 3(前書き)

今回で虎牢関は終了します

虎牢関（ころうかん）の戦い 3

海は呂布と戦っている

仙「はああああ!!」

呂「ふっ」

ガキン！ガキン！ガキン！

仙「やるな、呂布」

呂「・・・そつちこそ」

俺は呂布とかなりの時間戦っていた
だが・・・

仙「そろそろ終わりにするか」

腕も痺れてきたことだし決着をつけないとな

呂「・・・終わりにする」

仙「ああ、そうだな」

そう言つと二人は構えたまま動かなかった
しばらくして・・・

仙「はああああ!!」

海が先に動いた

呂「ふっ」

ガキン！ガキン！ガキン！

仙「まだまだ!!」

すると、海は刀から槍に持ち替える
その槍は禍々しい程に赤かった

呂「赤い？」

仙「この槍はな、クーフランの猛犬が使っていた物だこの速さとかと見よ！！」

そして、海は高く飛び上がり

仙「ゲイボルグ！」

呂「！？」

ドッカーン

仙「峰打ちだ安心しな。ていう事で、敵将呂布捕らえたり！」

（曹操軍）

曹「今だ！虎牢関を一気に落とせ！」

兵「おおおおお！！！！」

仙「落ちたか」

ピピピ（無線機音）

仙「なんだ？一刀」

—「こっちは終わったぞ」

仙「ああ、こっちも終わった」

—「じゃあ、帰るか」

仙「応、じゃあ本陣で待ち合わせな」

—「分かった。」

こうして、捕らえた敵将を持ち帰った

〈本陣〉

仙・—「たっただいま」

桃・大「ご主人様、海！！」

ガバ！

—刀「と、桃香！？」

仙「た、大蓮！？」

二人はハグされていました

桃「もう、心配したんだからねー」

—「わ、悪かったなでも、桃香が元気そうだなによりだ。」

桃「ご主人様も無事で何よりだよ！」

大「心配したんだぞ〜海」ぎゅ〜

仙「わ、分かったから、苦しい〜」

大「おっと、すまんすまん」

仙「ハア、ハア、死ぬかと思ったく〜」

海は、おっばいで窒息死するところだった

他から見たらえらく羨ましい限りである

仙「うるせーぞ！作者！」

大「海？何を言っているのだ？」

仙「悪い、何でもなしそれより、戦況はどうなった？」

大「こちら側が、圧倒的に関を破って占拠したよ」

仙「そうか。後、敵将を捕らえたんだけどどうしよう」

大「誰を捕まえたんだい？」

仙「呂布」

大「嘘！？」

仙「本当だよ、ほら」

と一緒にいたのがあの呂布だった

大「すごいわね、海」

仙「そうでもないよ結構大変だった」

大「そうかい、お疲れ様」

仙「そういえば、一刀も捕まえたんだってな」

一「ああ、張遼を捕まえた」

桃「すっごーい！！さすが、ご主人様」

仙「へえー神速の張遼を捕まえるとはやるな一刀」

一「そうでもないさ、三国一の呂布には敵わないよ」

大「そういえばさ」

仙「？どうした、大蓮」

大「海と一刀はどっちが強いんだい？」

仙「一「え？」」

桃「あっそれ私も思ったんですご主人様と海さんどっちが強いのか

なつて」

大「おつ話が分るねー桃香、じゃあこの反董卓連合が終わって少ししたら大会を開かないかい？」

桃「あついいですねーそれに海さんとご主人様も出すということですね」

仙・一「え？あの、ちよつと」

大「よし、決まりだ二人ともそれでいいね」

仙・一「はい・・・」

二人は落ち込んでしまった

虎牢関(ころうかん)の戦い 3(後書き)

今回も無事におわった

仙「おい、作者姿見せる」

いや無理

仙「なぜだ？」

だって、今回の話でなんかボコこられそうなんだもん

仙「そんなことしないって」

ほんとに？

仙「ああ」

分かった。ひゅん

作「いやー姿見せたほうがいいよね。あれ？海ーどこー？」

仙「こつちだ」

作「ん?!?!」

ウーーンガチャ

作「撃てー!!」

ドンドンドンドン

作「ギャー！ー！？」

ドサッ

仙「ふーすつきりした。次回もお楽しみに」

洛陽に到着！しかもサプライズ！？

虎牢関を突破した連合軍は洛陽の目の前まで来ていた。

仙「とうとうついたな」

大「そうね」

仙「でも、なんで止まってるの？」

大「ああ、何でも袁紹と袁術が争ってるみたいよ」

仙「なんで？」

大「どっちが一番乗りするか」

仙「はあくアホらし」

大「そうだね」

それから数十分後・・・

仙「やっと動いたな」

雪「海」

仙「雪蓮かどうした？」

雪「母様が、これから町の復旧をやるから手伝って欲しいって」

仙「分かったすぐ行くよ」

そして海は大蓮のいる町の中心地に向かっていた

仙「大蓮」

大「来たね、海」

仙「ああ、どうすればいい？」

大「町が所々焼けちまっているようだからね」

冥「どうやら、黄巾の残党がいたみたいだな」

仙「あんな、屑野郎共がいたとはな」

大「それは、後でいくらでもできる。今は、町の復旧が最優先だよ
そう言つと大蓮は兵士の方に向いた

大「皆の者聞けい！」

ザッ

大「これから、町の復旧作業に入る。民と協力し作業を開始せい！
ただし、物は取るな。我等は賊ではない。もし、取ったら斬首と
心得よ！」

兵「応！」

大「では、開始！」

その発言の後、兵士たちは各々作業を開始した

仙「さて、俺も手伝うとしますか」

「トレース・オン」

海が創造したのは一台のクレーン付きトレーラーだった

大「海、それは？」

仙「ああ、こいつは物をたくさん運ぶことができる車だよ。」

大「ふーん、じゃあこっちの棒は？」

仙「そっちは、人の力じゃあ持ち上がらないものをあげるための装置だよ。例えば・・・」

周りを見渡していると兵士が重たそうな柱を運んでいた

仙「おーい、そこの君」

兵「はっ、何でしょう？海様」

仙「その柱、降ろしてくれる？」

兵「分りました」

兵士が柱を置いてその場から離れた

ガチャガチャ

仙「これでよし」

大「どうするんだい？海」

仙「まあまあ、見ててよ」

ポチツウィーン

み「おおー」

仙「どうよ？」

大「すごいわね！海これなら、作業が早く進められそうね
とクレーンの事で話していると

？「大蓮様ー！」

大「ん？どうしたんだい明命」

通りの向こうからものすごい勢いで走ってくる明命がいた

明「向こうの井戸が光っています！」

と興奮気味に話してくる明命

仙「落ち着け、明命。はい、深呼吸」

明「すーはーすーはー」

仙「落ち着いた？」

明「はい！」

仙「じゃあ、もう一回説明してみて」

明「はい、向こうの通りで復旧作業を手伝っていましたが井戸がありまして覗いたら底の方が光っていたんです」

大「気になるね。行ってみようか、海」

仙「ん？ああ、」

洛陽・井戸・光る・・・まさか!?

大通りを歩いて裏路地に入ったところで井戸が見つかった

大「ここかい？」

明「はい」

仙「明命、この井戸に入れる？」

明「まあ、入れないことはないですけど」

仙「じゃあ、入ってみてくれる？」

明「はい、わかりました」

そう言っ井戸に付属している桶に足を掛けた
カラカラ

大「何か知ってるみたいだね。海」

仙「うん、まさかとは思うけどね」

そして、明命が上がってきた

明「井戸の底にこんなのがありました」

手渡してきたのは一つの袋だった

仙「大蓮、開けてみて」

大「分かったわ、印？違う、これは！？」

「伝国の玉璽！？」

仙「やっぱりか」

大「やっぱりって海は、知ってたのかい？」

仙「ああ、俺の世界の歴史だと孫権がこれを使って皇帝となったのが有名だな」

大「明命、これは最重要項目とする。後、冥琳に伝えて噂を流しておくれ、呉の孫堅が玉璽を手に入れたとな」

明「わ、分かりました」

大「海もわかったね？」

仙「ああ、」

大「よし、しばらくはここに留まって復旧作業をするよ」

仙「応！」

こうして、俺たちはものすごい獲物を手に入れたのだった

洛陽に到着！しかもサプライズ！？（後書き）

作「第27話終了ー」

仙「無事に終わったな」

作「うん、玉璽も手に入れたことだしこれから、どんどん大きくなるよ」

仙「これからが忙しくなるんだな」

作「そうだね、でも武器とかも新しく搬入する予定だから」

仙「いいセンスだ！」

作「あざーす！」

仙「よし、それじゃあいつものいくか」

作「そうだね。せーの」

二人「次回もお楽しみに！！」

大蓮とデート

洛陽で伝国の玉璽を手に入れてから数か月が過ぎた。しばらくは内政で忙しかったが徐々に休みをもらえた。

仙「ん〜！久々に休みだ〜」

と庭の芝生で日向ぼっこをしていた

大「海〜」

仙「ん？」

起き上がると庭の反対側から大蓮が来た

仙「どうした？大蓮」

大「海、今日は暇？」

仙「ああ、今日は休みだから暇だよ」

大「じゃあ今から街に行くんだけど一緒に行こう？」

仙「いいよ」

こうして、海は大蓮と一緒に街に出かけることになりました。

〜街中〜

大「えへへ〜」

大蓮は海と一緒にに行けるのが嬉しいのか上機嫌であった

仙「まるで、デートだな」

大「でーと？」

仙「ああ、好きな男女同士が街に行って外食したり遠出することを言うんだよ」

大「へ〜、じゃあ他の人たちには私たち恋人に見えるのかな？」

仙「ああ、そうかもしれないぞ。まあ、俺としては嬉しいがな」

大「どうして？」

仙「どうしてもなにも、こんな美人と一緒にデートできるなんて夢にも思わなかったからな」

相変わらずとんでもないことを言うお方だ

大「ちよ、海。恥ずかしいこと言わないでよ¥¥¥」

仙「そうか？」

大「そうよ、もっと自覚したほうがいいわよ」

仙「あっそつだー!!」

海は急に何か思いついたらしい

仙「大蓮、今日は一日休みなのか？」

大「え？ええ、」

仙「じゃあさ少し遠出しないか？」

大「遠出？それじゃあ馬を用意しないとね」

仙「いや、馬は必要ない」

大「どうして？」

仙「こっちで行くからさ」「ひゅん

大「なるほど、それじゃあ行きましょう」

仙「ああ、」

そして、街の外に出た俺達は車に乗り海を目指した

仙「到着」

到着したところには夕方になっていた

大「ねえ、海」

仙「なんだ？」

大「なんで海に来たの？」

仙「すぐに、分るよ」
「おっそろそろだな」

大「？」

仙「見てくらん」

大「わあ〜」

そこに広がるのは紅く染まる海の姿だった

仙「俺のとおっておきだ」

大「すごくきれいだわ。これを見せるために？」

そう、此処に来る前に他の街でわざと時間を遅らせて夕方に着く様に設定したのだ

仙「うん、そうなんだけどね。まあお礼も兼ねてかな？」

大「お礼？」

仙「ああ、見ず知らずの俺を拾ってくれてありがとう

これからも、ずっと大蓮のそばにいるよ」

大「海！」

ガバツ！

大「ずっとこれからもいてね？」

仙「ああ、もちろんだ。後、渡すものがあるんだ」

大「渡すもの？」

仙「手、だして？」

言われるがままに手を出した大蓮
スッ

大「これは、指輪？」

仙「ああ、俺の国の習慣でな婚約するとき指輪を薬指にはめるんだ」

大「婚約・・・」

仙「これは、ずっと大蓮を愛しているという証にしたいんだ」

大「海・・・ありがとう！」

チュ

それは、長い長いキスだった

仙「ぷはっ」

大「ぷはっこれからよろしくね私の旦那様¥¥¥」

仙「ああ、もちろんだとも」

大「あっそれと」

仙「？」

大「ちゃんと娘たちも愛してね」

仙「ああ、」

大「じゃあ、帰ろうかつといってももう夜だね」

仙「大丈夫ちゃんと考えているから」

「トレース・オン」

そう言うと一緒にの輸送ヘリが出てきた

大「海、これは？」

仙「これは、ヘリコプターと言って空を飛べるものなんだ」

大「空を？」

仙「まあ、乗ってみた方が早いけどな」

ガチャン

仙「スイッチオン！」

カチッヒュウウウウン

フワッ

大「ひゃあ!?!」

「と、飛んでる」

仙「よーしこのまま一気に真に向かうぞー!」

と一気に真に向かったのだが城に近づいた瞬間に警戒態勢にされ攻撃されたのはまた別の話

大蓮とデート（後書き）

作「おめでと〜」

仙「いきなりなんだ？」

作「いや、だってやっと大蓮に告白したんだよ嬉しいに決まってるじゃん」

仙「そ、そりゃあまあな」

作「大蓮さんもおめでと〜」

大「あ、ありがとう」

作「じゃあ二人の門出を祝って次回もがんばりましょー」

海・大「おー」

作「せーの」

三人「次回もお楽しみに」

作「次からまた、戻ります」

仙道、部隊を持つ

久々に街の警邏に出ていた海は、いろんな人に親しまれていた

おば「おにーさん、これ、美味いから持っていきな」

仙「お、ありがとーおばちゃん」

おじ「おう、海のにーちゃん」

仙「お、おっちゃん景気はどうだい？」

おじ「まあ、上々だね」

仙「そうか、仕事がんばれよ」

子供「あ、海にーちゃんだ！遊んで！」

仙「応、じゃあ鬼ごっこでもやるか」

子供「わーい」

と街の人々に大人気であった

警邏が終わって一旦自分の部屋に戻ろうとしたが途中侍女に大蓮に呼ばれているというので、大蓮の部屋に向かった

コンコン、

仙「大蓮くいるか？」

大「海が入っておいで」

ガチャ

仙「どうしたんだ？」

大「なあ、海、部隊を持ってみないかい？」

仙「部隊を？」

大「ああ、そろそろ持たせた方がいいかなっと思っただけ。嫌かい？」

仙「嫌っていう程じゃあ無いんだけど、ただそういう事をやる機会が無かったからさ」

大「ふーんなるほど、じゃあまずあたしが見てあげようか？」

仙「まじで？それは、有難い是非頼むよ」

そして、二人は鍛錬場に移動した

すると、中から声が聞こえてきた

仙「誰がやっているんだ？」

大「あれは、祭だね」

中に入ってだんだんと祭の音が大きくなってきた

祭「ほれ、右翼！！貴様らが遅いせいで、部隊が全滅してしまうぞ。左翼、味方に頼るな己が一撃で仕留めるつもりで動け！！」

兵「応！」

仙「すごいな」

俺は祭の練習風景を見てて感心した

仙「そういえば、俺が持つ部隊は？」

大「ああ、こっちに居るよみんな入ったばかりの奴らだから扱いやすいと思うよ。」

仙「そうか、因みに練習内容は俺独自のものでいいか？」

大「ああ、構わないよ」

と話している内に新兵がいる鍛錬場に着いた中に入ると、バラバラに喋っている新兵達がいた

大「あいつら」

と大蓮が動こうとしたが、俺が抑えた

大「海？」

仙「此処は俺に任せてくれ大蓮は上から見ててくれ」

大「分かったわ」

と言つて大蓮は上に上がった

仙「さてと」

俺は兵士の前に立つて見渡した。そして、

仙「全員整列！！」

兵「！？」

ザッ

仙「今回から貴様らの担当になった仙道海だ！

ここで貴様らに聞きたいと思う。貴様らの中で腕に自信のある者、前に出よ！」

すると、数人前に出た

仙「では、これから試合を行う。今、前に出た数人一斉に俺に掛かれ！」

そう言つと、一瞬躊躇つたが、掛かつて来た

兵「オラアアアアアアア！！！」

仙「甘い！」

そういつと真ん中の兵士をCQCで倒し

その後隣にいた兵士を槍で気絶させたここまでの時間、わずか10秒足らずで終了した

仙「なんだ？その程度の自信で軍に入ってきたのか？呆れるにも程があるぞ。貴様らは一からやり直させる！覚悟はいいな？」

兵「は、はい！」

そこから、地獄のような訓練が行われたが、なぜだか兵士のみんなは、活き活きと励んでいた

仙「これにて、訓練を終了する！」

兵「ありがとうございます！教官！」

仙「解散！！」

と言われて、各々帰って行った

仙「ふい〜疲れた〜」

大「お疲れ様、海」

仙「おう、付き合ってくれてありがとうが大蓮」

大「気にしないで、それよりもす〜いわね」

仙「何が？」

大「兵士だよ。みんな活き活きしてじゃないか」

仙「ああ、あれね。簡単だよ、新しい技術を教えたのさ」

大「技術？」

仙「ああ、こいつのね」ひゅうん

出てきたのは銃だった

大「これがかい？」

仙「ああ、みんな熱心に聞いてくれたよ。今度の訓練のときに使おうかなって思ってる」

大「ふーん、まっ今後ともよろしくね。海」

仙「おう、まかせとけて。じゃあ飯でも食いにいくとしますか」

大「私も行くぞ」

こうして、一日が終了する

新たな戦乱の幕開け（前書き）

なんか、ぐだぐだになってきました。ごねんなさい（泣）

新たな戦乱の幕開け

反董卓連合から数ヶ月後、袁紹が公孫讃の領地吸収したとの情報が入った

冥「なお、公孫讃は、桃香の領地に逃げ切ったと報告が入っております」

大「そうかい、この後はどう出てくるかね」

冥「恐らく、桃香の領地を狙うと思われませう」

仙「そのことについていいか？」

大「どうしたんだい、海？」

仙「ああ、一刀に渡しておいたんだが、もしもなんか遭った時には無線機で連絡するようになってある」

二人「むせんき？」

仙「遠くにいる人と話ができる機械だよ」

冥「ほう、遠くの人間と」

冥琳の目が輝いて見えたのはあえて触れないようにした

大「と、とにかく、もし、危険があれば連絡が来るんでしょ？」

仙「あ、ああ」

大蓮も空気を読んだようだ

大「とりあえず現状維持ということでもいいわね」

仙「ああ」

と言った瞬間

ピュピュ

仙「こちら、仙道海どうぞ」

一「こちら、北郷一刀だ」

仙「どうした？」

一「ちょっと手に負えなくてな手伝ってほしい。」

仙「ああ、いいぞ。攻めて来たのは袁紹か？」

一「よく分かったな」

仙「なんとなくな。で、あっちの兵数は？」

一「約15万だ」

仙「15万!？」

—「ああ、数で物を言わせる気みたいだ」

仙「もう、始ってるのか？」

—「今、ちょうど始まったばかりだ」

仙「よし、分かったすぐ行く」

—「頼む、out」ザッ

仙「大蓮」

大「分かってるよ。みんな、今すぐ準備しな！」

全「応！」

そうして、みんな準備を始めた

数時間後

雪「母様、準備が整ったわ」

大「分かった」

雪「でも、どうするの？今すぐに行っても最低三日はかかるわよ」

大「それについては、大丈夫だよ。ねっ海？」

仙「あたばーよ」

雪「どんなの？」

仙「まあまあ、見てなって」

そう言うと海は平原の方に向き直った

仙「トレース・オン」ひゅうん

すると、一台の飛行機が出てきた

だが、飛行機と呼ぶにはあまりにも大きかった。飛行機の名は「ムリーヤ」エンジンを6機も積んだ世界最大の飛行機である
海と大蓮以外は驚いていた

雪「海、これは何？」

仙「これは、飛行機って言って人や物を大量に輸送できる乗り物だよ」

みんなムリーヤの周りを見ていた

シャオ「すごいおっきいね」

祭「すごい冥琳」

冥「ええ、」

仙「みんなー早く乗れー」

と海の一言でみんな飛行機に乗った

仙「さて、一飛びしますか」

カチッヒュウン

〜機内〜

ピンポンパンポン

仙「え〜機内のお客様に連絡いたします。これから、飛びますがその前にベルトの着用をお願いいたします」

蓮「べると?」

仙「詳しくは、前のテレビをご覧ください」

とアナウンスが流れみんなはテレビを見た

〜説明中〜

冥「ふむ、このテレビというのはとても便利だな」と感心した

そして再びアナウンスが流れた

仙「皆様、ベルトの着用はわかりましたか?では、着けてください」

そしてみんなつけ始めるがいかんせん初めてのことなのでうまくいかなかったが軍師組と大蓮、祭はすぐにつけた

仙「皆様、着け終わりましたか？では、これから出発いたしますので振動にご注意ください」

と放送が流れた後しばらくして振動がきた

（操縦室）

仙「よっしゃあ」

と無事に飛んでいたことを喜んだ海であった。

そして、一刀のいる蜀へ飛んで行った。

袁家をぶっ壊す！！

海達は一刀の救援要請で蜀に向かっていた
その頃一刀は・・・

↳一刀視点↳

俺は袁紹が国境を越えたという報せを受けて軍議を開いていた

一「じゃあ始めようか。朱里」

朱「はい、現在袁紹さん達は国境を越えここを目指しております」

星「ちなみに数は？」

朱「約15万と聞いています」

桃「15万!？」

翠「うへー」

と馬超こと翠は内心では驚いていた

桃「どうしよう」

そこで、一刀が口を開く

一「落ち着け、桃香」

桃「でも・・・」

—「こつこついう時のための同盟だろ？」

桃「同盟・・・あ！」

—「実は、海に連絡して今こつちに向かって来てもらってるよ」

愛「しかし、来てもらうとしても時間がかかりますよ？」

—「大丈夫だ一応、開戦までには間に合うように連絡したから」

愛「なるほど」

—「よし、みんな準備を始めてくれ」

全「応！」

〈一刀視点〉out

その頃海さんは・・・

仙「うん、順調、順調」

大「誰に言ってるんだい？」

仙「気のせい。所でなんか用か？」

大「ああ、後どれくらいで着くかと思ってな」

仙「ん〜後、一日位かな」

大「そうかい。それにしてもすごいわね」

仙「なにが？」

大「こんなにもでかい物が飛べるんなんて」

仙「まあ、技術の結晶ていうやつかな？大蓮も休んだら？」

大「ああ、そうさせてもらつよ頑張つてね。海」

仙「応」

そして、時間は過ぎていき夜になった

蓮「海」

仙「ん？蓮華どうした眠れないか？」

蓮「ええ」

仙「隣、どうだ？」

頷いて隣の席に着いた

仙「大蓮達は？」

蓮「寝てるわ」

仙「そうか」

蓮「ねえ、海」

仙「なんだ？」

蓮「私たちはこの先どうなっていくのかしら」

仙「そんな事いくら俺でも分からないよ。けどね、俺が居る限り孫呉は永久的に不滅さだから、蓮華も俺が守ってやる」

蓮「海・・・ありがとう」

仙「気にすんな俺が好きでやってる事だからな。さあ、もう寝な明日には着くから」

蓮「ええ、お休み、海」

仙「ああ、お休み」

そうして夜が更けていく

〜次の日〜

仙「さて、そろそろ着く頃だな」

と言うと無線機を取り出した

仙「亜々こちら、大日本帝国軍仙道海軍曹であります。応答願いたい」

―「何をやってんだよ。海」

仙「おお、我が同志一刀くん!」

―「はいはい、それはもういいからで、どうした?」

仙「なんで乗ってこないんだよ。まいいや、もうすぐそっちに着くぞ」

―「マジか。良かった丁度良い所で着いてくれたな」

仙「空から行くから注意しておいてくれ」

―「分かった」

無線で一刀に連絡するとアナウンスを入れた

仙「みんな、起きてくれ、もうすぐ着くぞ」

そう言っただけで操縦に専念した

〔桃香視点〕

今、目の前には袁紹さんの軍が広がっています

―「もうすぐだな」

ご主人様は空を見上げながら言った

桃「ご主人さま、海さんたちはどっちから来ますか？」

—「もちろん、上から」

桃「上？」

なんで？と聞こうとしたとき物凄い音がした

ゴオオオオオオ！！

桃「きゃっなに！？」

—「来たか・・・」

すると上から巨大な何かが横切った

（桃香視点out）

仙「よし、このまま着陸する。みんな戦闘準備しておけよ」

全「応！」

ザッザザアア！！

そして飛行機は無事に着陸した

仙「よし、まず俺が先陣を切る。みんなは、桃香達と合流してくれ」

大「分かったわ。海、気おつけてね」

仙「よし、行くか」

♪♪♪

仙「一刀、聞こえるか？」

一「ああ、聞こえる」

仙「こつちに来て手伝ってくれないか？」

一「分かった」

しばらくして、一刀が来た

一「よっ久しぶりだな」

仙「ああ、それじゃあ、いっちょおっばじめますか」

（袁紹視点）

私は今劉備さんを撃破するべく進軍しています

袁「おーほっほっほっほ皆さん華麗に進撃なさい」

私の優秀な兵たちを見れば一目散に逃げ出すことでしょう
と意気揚揚に行きましたら突然・・・

ゴオオオオオ！！

袁「なっなんですの!?!」

突然大きな音が鳴ったと思ったら上から巨大な何かが飛んできたで

はありませんか

そして、それは劉備さんの城の近くに止まりました

〈袁紹視点out〉

俺は一刀と合流したあと機内でブリーフィングを行った

仙「さて、どうやって片付けますか」

ー「そうだな、あいつらは、馬鹿だし兵士なんかは戦車で迎撃すればいいんじゃない？」

仙「そうだな。そうするか」

仙「トレース・オン」

海が出したのはエイプラムズ2台とアパッチ戦闘ヘリを出した

ー「おお〜エイプラムズとアパッチか。いいセンスだ」

仙「戦闘開始だな」

そして、未来の兵器VS袁紹軍の戦いが始まった

仙「撃てー!!」

ドーン!!ドカーン!!

ー「よし、今ので200人は倒したな」

仙「やるねー俺も負けてられないな」

ブオン！！キユイーンドン！ドン！ドン！ドン！

兵「ぎゃああああー！」兵2「た、助けてー！！！」兵3「じ、殺されるー！！！」

と圧倒的な力の前に成す術もない袁紹軍の兵士たち

袁「キーー何とかなりませんの！？」

兵「伝令！」

袁「なんですの？！」

兵「後方から蜀呉の兵士たちが突っ込んできます」

袁「なんですって！？」

どうしましよこのまま逃げまじょうか

海・ー「逃げられると思ってんの？」

振り返るとそこには武器を構えた二人がいた

袁「ひっ」

海「お前さあ、自分だけ逃げるとかどういつつもりなの？」

袁「お、お黙りなさい私は、袁「黙れ！」ひっ!？」

—「袁家だからどうした？所詮は何にも出来ないお嬢様だからな」

海「ここで、今すぐ決めろ、死ぬか、逃げるか」

袁「・・・逃げますわ」

そう言うと袁紹は数人の部下を連れてどこかへと行ってしまった

仙「これで、終わったな」

—「ああ、悪かったなこんな茶番に付き合ってくれて」

仙「気にするな、実際そうでもしなきゃあ15万なんて大軍勝てねえよ」

—「ふっ確かに」

こうして無事に終了した

宴会だー！

袁紹との戦いの後、俺たちは桃香の城に招かれた
そこで、宴会が開かれた

仙「どうして、こうなった」

なぜこんな事を言うのかと言うと、目の前でカオスな状況だったか
らだ

桃香は酒癖が悪いのか誰彼構わず絡み酒をしている

大蓮は星達と飲み比べを始めるし蓮華も酒癖が悪く蜀の軍師に絡み
酒をしている

あつ朱里が落ちた。南無

雪蓮は冥琳と珍しく静かに飲んでいた

仙「よっ一刀」

ー「おお、海」

仙「一緒に飲もうぜ」

ー「ああ、」

トクトク

仙・ー「ンツンツぷはー」

仙「いや〜美味いね〜」

—「ああ、美味しいな」

仙「やっぱ勝った後の酒は美味しいな」

二人は余韻に浸っていた

—「それにしてもカオスだな」

仙「ああ、」

目の前の惨状は非常に酷だ。あつ明命が落ちた。

—「そういえば、酒飲むの久しぶりじゃね？」

仙「確かにそうだな。懐かしいなよく二人で隠れて飲んできたもんな」

—「ああ、及川とか巻き込んだりして」

二人「あはっはっはっは」

二人は思い出に浸ってた

しかし、彼らは気づかなかつた後ろに居る人物を……

大「かゝい」ムギユ—

桃「ごしゅじんさま」ムギユ—

仙「わっ！？大蓮！？」

—「と、桃香？」

大「何でこんなところで飲んでんだい？」

桃「こっちで一緒にのもよよ」

仙「だー分かった、分かった」

一「と、とりあえず、離れて」

大「もしかして嫌だった？」

仙「いや、そんな事はないけど恥ずかしいって言うかみんなにジト目で見られてるから」

そこには般若化したみんながいた

雪「母様、なにやってんの？」メラメラ

愛「桃香様抜け駆けは無しですよね」

桃・大「あ、あははー」サー

仙「み、みんな落ち着けて」

一「そうそう、楽しく飲もうよ」

蓮「まあ、海がそう言うなら」

朱「ご主人様がそう言うなら」

海・一「イエツシ」

そこからは派手にどんちゃん騒ぎをした翌日兵士が訪ねた所、物凄
い事になっていたという

数日経って仙道達は、飛行機で帰って行った

宴会だー！（後書き）

作「終わったー」

仙「おい」

作「なに？」

仙「どうして、俺は酒が飲めていたんだ」

作「だから、現代世界で既に飲んでいたんだよ」

仙「俺はまだ未成年だろうがー！」

バキヤー

作「ウゴハー」「ゴロゴロ

仙「全くこの無能が！」

作「ず、ずびません」

仙「では次回もお楽しみに」

諸侯の動きと街の整備

袁紹との戦いの後、呉に帰ってきた俺達は、各地に斥候を送り諸侯の動きを探っていた
その報告結果をみんなで聞いていた

冥「では、これから報告いたします」

大「頼むよ」

冥「はつまり、曹操ですが、袁紹の領地を吸収して西涼の馬騰に進攻してきました」

仙「なるほど」

冥「次に桃香の所ですが、蜀の劉表を落として、有力な将を取り込みました」

雪「将って？」

冥「嚴顔と魏延と黄忠だ」

仙「これで、五虎将軍がそろったわけか」

大「五虎将軍？」

仙「ああ、俺の世界で蜀の将軍の別名だよ。関羽を筆頭に張飛、馬超、趙雲、黄忠の五人だ」

大「へえー」

雪「じゃあ、海、私たちは？」

仙「呉だと、江東の虎・孫堅、江東の小霸王・孫策、碧眼児の孫権、美周郎の周瑜……」

とみんなの別名をあげた

雪「へー天の国じゃあ私たちも有名なんだ」

仙「ああ、そういえばその他はどうなんだ？」

冥「お互いで潰し合うかどこかと同盟を組もうとしているな」

仙「へー」

大「とりあえず、報告は以上だね」

仙「そうだ、大連、ちょっと街に対しての提案があるんだけど」

大「提案？」

仙「ああ、この街の警備体制ってどうなってる？」

大「えーと、それぞれの門の所に兵を置かせてるぐらいだけど」

仙「なら、いい方法がある。」

大「どんな？」

仙「まず、街のそれぞれの区域があるだろ？その中心に詰所を置くんだ。」

大「置くとしても兵は何人ぐらい置くんだい？」

仙「2〜3人ぐらいで十分だよ。それで、交代制にするんだ」

大「その方法は天の？」

仙「ああ、俺らの国でいう警察って組織の交番っていつやつなんだけど仕事内容としては喧嘩の鎮圧から道案内までやるんだこっちなら新兵の経験にも役立てると思うよ」

大「なるほどね」

それからすぐにその提案が回されて街の各所に詰所が造られた

すぐには発揮しなかったが、徐々に街の人達も受け入れてくれて利用するようになった

また、犯罪の発生率も抑えられるようになった

冥「以上が街の報告になります」

雪「すごいわね」

蓮「ええ、すごいですね」

大「これも全部海のおかげだよありがとう」

仙「いやいや俺はただ、知識をだしたただだよそれを言うなら。この案に賛同してくれたみんなや兵士さんに言うべき言葉だよ」

なんとこの事が自分の手柄をみんなのおかげという一言で片付けてしまうとは

羨ましいじゃあねえかコノヤロー

仙「うっせーよ作者」

祭「誰と話しておるんじゃ？」

仙「気にしないで」

大「さて、こんなにも功績をだした海には何か褒美が必要だね」

仙「え！？いや、いいよだって当然の事したまでだし」

雪「海、この世界ではね礼を貰わないと失礼に値するわよ」

仙「うっ、分かった貰うよそれじゃあね」

海は暫く考えた

そして……

仙「よし、ピクニックへ行こう！」

大「ぴくにつく？」

仙「あ、えーと遠乗りと同じ意味だよ」

大「遠乗りか」

仙「何か良い所はある？」

大「ならば、あそこだね。祭」

祭「よし、きた皆準備せい」

全「応！」

仙「なあ、大蓮何処に行くんだ？」

大「この近くにね孫家しか知らない場所があるんだよ」

仙「へーそうなんだ」

大「じゃあ門で待っててね」

仙「了解」

ー門前ー

大「みんな揃ったかい？」

雪「ええ、揃ったわ」

大「海は？」

蓮「直ぐに行くって言ってましたけど」

すると丁度よく海が来た

仙「お待たせ」

大「海、遅かったじゃない」

仙「悪い悪いこれ出すのに手間取ってさ」

海の後ろにはトレーラーハウスだった

冥「これは？」

仙「こいつはトレーラーハウスって言って前に出したキャンピングカーの発展版なんだ」

全「へー」

仙「じゃあみんな乗って」

そして、乗り込んだ後、出発した

桜園(前書き)

今回は短かいです

桜園

荒野に一台のトレーラーハウスが走らせている

仙「大蓮、あとどんぐらいだ？」

大「後、三里ほどだよ」

仙「分った」

数十分後

仙「おお〜こいつはきれいだな〜」

大「そうだろう、なんせ孫家が代々、守ってきた桜園なんだから」

そこに広がるのはきれいな桜色をした桜園が広がっていた丁度いい時期なのかほぼすべての桜が咲き乱れていた

そこに、トレーラーを止めてみんなを降ろした

シャオ「やつぱり、いつ来てもきれいだね。お母様」

大「ええ、そうね」

仙「桜か・・・」

雪「どうしたの？海」

仙「いやなに、自分の世界の事を思い出しちまっただけさ」

海はみんなに心配させない様に振舞ったがみんなには暗く見えた

祭「海・・・」

仙「あつ心配すんなよ。現代社会に戻りたいっていうわけじゃあないんだ。なにより今の生活の方が十分楽しいしな」

大「当たり前だよ、海。どんな事を言っただって私は離れるつもりはこれっぽっちもないからね」

雪「そうよ、海は家族も同然なんだから」

蓮「私の練習相手にもなってもらわなきゃ困るわよ」

冥「私もお前が必要だからな」

明「もつと、海様と仲良くなりたいです！」

思「師匠がいなくなったら誰に鍛えてもらえばいいんですか。」

穩「海さんの知識をもっとください！」

亜「天の国の料理をもっと教えてください」

とみんなから励ましてもらった海である

仙「みんな、ありがとう」

大「よし、みんな海が天に帰りたくならないように思い出を沢山
作ろう!！」

全「おう!」

そこからは、どんちゃん騒ぎだった。

いきなり、祭さんが飲み比べを始めた

雪蓮が試合をやるとか言い出し

蓮華が絡み酒をしてきたりそれはもう大変だった

それから、夜になり城に帰って行った

翌日ほとんどが二日酔いになやまされるのであった

霸王・曹操との戦い

それは、突然やってきた
見張り台

兵1「ふわ〜見張りは暇だな〜」

兵2「おい、そんなことを言うなこれも重要な仕事だぞ」

兵1「んなこといってもよ〜」

兵2「ま、しょうがないか。ん？」

兵1「どうした〜？」

兵2「いや、向こうに見えるのはなんだ？」

兵1「商人かなんかじゃないの？」

兵2「いや、それにしちや数が多いだろう」

兵1「他に特徴は？」

兵2「ちよつと待て、旗が見えるな・・・曹!!!」

兵1「曹操だつて!?!早く知らせにいくんだ!」

兵2「わ、分つた!!!」

〔宮殿〕

大「海、今暇かい？」

仙「ああ、大丈夫だけどどうしたの？」

大「ちょっと付き合っしてほしいのよ」

仙「別にいいけど、どこ行くんだ？」

大「いいから、いいから」

仙「わ、分ったから引張るなっ」

大「じゃ、みんな行ってくるわ」

冥「お早めをお願いしますよ。大蓮様」

大「分かってる」

雪「あははは、母様も強引ね」

冥「さあ、我々も仕事を片付けるぞ」

雪「はい」

〔近くの小川〕

大「はい、到着」

仙「で、ここに何があるの？」

大「これ」

と大蓮が指指すのは、小さな墓石であった

仙「墓？」

大「そう、うちの夫が眠ってるところさ」

そついうと墓石を洗い始めた

仙「手伝うよ」

大「ありがとう」

〽宮殿〽

冥「なに！？曹操が攻めて来ただと！？」

兵2「はい、すでに展開が始められています」

雪「冥琳！」

冥「わかっている、雪蓮、すぐに大蓮様と海を呼んで来てくれ」

雪「分かったわ」

タッタッタッタ

冥「よし、他の者はすぐに準備しろ！」

全「応！」

軍の準備が進められて行った

（魏の陣地）

桂「華琳様、軍の展開終わりました」

華「分かったわ。ふふ、楽しみね」

桂「もう少しですね」

華「ええ、この霸王の力を示せるわ」

稟「か、華琳様ー！」

華「どうしたの？稟」

稟「許晶で形成された一団が離反しました」

華「ほつときなさい。どうせ使えないものたちだから」

稟「はあ、ではこれからどうしますか？」

華「しばらく、ここで待機ね」

稟「わかりました」

「近くの小川」

ようやく、俺達は墓を洗い終えた

仙「これで、一通りかな？」

大「ええ、ありがとう海」

仙「気にすんな。それよりも挨拶しなきゃな」

大「ええ、あなた紹介するわね。こちら私の旦那様の仙道海だよ」

仙「どうも、初めまして仙道海です。大蓮の元で御世話になっております。これからも守って行くのでどうか見守っててください」

と挨拶した時、殺気を感じた

仙（なんだ？賊か？あそこの草むらからか）

しばらくは動かなかったがやがて・・・

仙（来る！）「大蓮伏せる！」

とっさにびっくりしたが伏せる大蓮、それと同時にM870を出して攻撃した

ドオン！！ドオン！！ドオン！！

？「ぎゃあー？」「ドサッ

三人はいたが、しかしまだ殺気があることに気付いた
しかも、丁度自分の後ろにいた

仙「!?!くそ、」

ヒュン!ザシュ

仙「ぐっ!?!この!」

ドオン!!

?「ぐわ!?!」

大「海!」

仙「へへへ・・・俺としたことがへましちゃったぜ」

大「喋るな!海、今直すよ」

仙「くそ、これで終いかまだまだやりたいこといっぱいあったの
な」

大「これからも、一緒にいるんだろ?なら、あきらめないでよ!」

雪「母様!?!どうしたの!?!」

大「海が・・・私を守ろうとして」

仙「へへ、このぐらいどうって事はないぜ。げほ!」

大「雪蓮、直ぐに医者を探してそれでどうしたの？」

雪「曹操が攻めて来たの」

大「そう」スクツ

雪「母様？」

大「雪蓮は海を医者に連れてって私は戦場に行く」

その目はいつもの目では無かった獲物を狩る目だった

雪「分かったわ」

（戦場）

華「遅いわね、孫堅は何してるのかしら」

夏「華琳様、単騎で出てくる人影が」

華「まずは、舌戦で挑むという事ね」

大「曹操、貴様はとても卑怯な奴だな！」

華「なんの事かしら？」

大「とぼける気か！我々に対し暗殺部隊を送り暗殺しようとしたではないか！！そのせいで、盟友の仙道海は瀕死の状態である」

華「なっ！？どついう事だ！誰が暗殺せよと命じた！」

夏「わ、我々がその様な事命じていませぬ」

華「なら、何故だ！？何故この様な事が起きる？」

稟「華琳様、原因が分かりました。許晶で形成された一団が暗殺を行つた模様です！」

華「その者共の首をはねよ！」

稟「え！？」

華「分からないか！英雄同士の決戦を下衆共に邪魔された怒りが分からないか！」

「秋蘭」

秋「はっ」

華「呉にとつもの使者を出せ我らは一度引く」

夏「し、しかし華琳様、今引けば被害が出る事は必須です！」

華「ならば、戦えと言つのか？下衆共に穢された聖戦にどの様な意味がある」

ウオオオオオオオオ！！！！

稟「ダメです！敵軍突撃を開始しました！」

復活せよ！！仙道海

仙「ここはどこだ？」

目を覚ますと周りは暗闇だった

？「やっと起きましたね」

仙「お前は、神！？」

神「お久しぶりです、海さん」

仙「ああ、久しぶり・・・って言うか何でここに？」

神「貴方は敵の矢で殺られたんですよ、だから、魂だけ此処に呼び寄せたんですよ」

仙「ああ、なるほどね。でも何で？」

神「話があったからに決まってるじゃないですか」

仙「ふんっで？話って言うのは？」

神「実はですね・・・」

仙「ゴクッ・・・」

神「私、宝くじが当たりました！」

仙「ふざけんなー！」
ドカツバキヤ

神「げべらー！？」

仙「何？そんな自慢話聞かせるために呼んだの？こっちは今大変なのに」

グリグリ

神「あつう、ずびません」

神は海にボコられました

神「と言つのは冗談でこれからが本番です！」

仙「最初からそうしろよ」

神「海さん、貴方は人の命をどう思っていますか？」

仙「どうってそりゃあ大切でしょ死んだら何も出来ないし」

神「それが、敵でもですか？」

仙「当たり前だ」

神「分かりました。では、貴方をもう一度復活させます」

仙「まじで！？ありがたいわゝあのまま大蓮と死に別れたら悔やみ切れないからな」

神「では、また恋姫の世界をお楽しみくださいね」

そう言うと、神の前にカードが出て来たそして・・・

神「私のターン、ドロ、死者蘇生！」

仙「おま、それパクリ・・・」

そこで、俺の意識は飛んだ

（呉の医務室）

蓮「うつつ海・・・」

思「師匠・・・」

祭「何故、儂よりも先に・・・」

雪「海、起きてよまた、一緒に鍛錬しようよ」

大「・・・海」

皆は悲しみにくれていた

ガチャ

冥琳が入って来た

大「医者は何だったって？」

冥「はい、ギリギリだそうです」

大「そうか」

皆は冥琳の話を聞いて落胆していた

その時である

ピカッ

雪「母様、海の体が!？」

大「何!？」

そう急に海の体が光出したのである

光は数秒後に収まった

そして……

仙「う……うん？」

海は起きた

冥「何と言う事だ、生き返っただと？」

仙「あれ?みんな、おはよう」

大「海!！」ガバツ!!

仙「お、おい大蓮……」

全「海〜！！」ガババツ

仙「おおう!?!」

みんな、海に抱きよった

仙「ただいま、皆・・・」

全「お帰りなさい!!」

こうして、海は復活したのである

復活せよ！！仙道海（後書き）

作「海さん、復活」

大「全くなんで海を死にかけさせたんだい？」

作「だって、主人公最強とはいえ人間なんだよ？そんな魔法が使えたりしたら、自分の主義に反するから、何より・・・」

大「なにより？」

作「そうしないと面白いと思わなかったから！」ビシッ！

仙「ほう？そんな理由だけで俺は死にかけたのか」

作「げっ海！？」

仙「命をかけるあるいはこの身に届くかもしれん」

作「マ、マテハナシアオウ？」

仙「問答無用！！核榴弾砲発射！！」

ドオウン！！

作「ぎゃ〜〜！！」バタッ

仙「この馬鹿者が」

雪「容赦無いわね」

シャ「それより、次のやついこうよ」

雪「ええ、そうねじゃあ」

雪・シャ「次回もお楽しみに」

部隊強化

しばらく、療養中だった海であったが医者から動いてもいいという
okサインが出たので
自分の部隊のところに顔を出しに行った

仙「よう、みんな元気だったか？」

兵「大将！もう大丈夫なんですかい？」

仙「ああ、医者から動いてもいいって言われたからな」

兵士みんなは海のことを大将と呼ぶ海自身も気に入ったらしく呼
ばれることにニコニコしていた

仙「よし、みんな今日は新しい訓練方法でやるぞ」

兵「新しい訓練方法ですか？」

仙「ああ、その前にみんなに支給品がある受け取ってくれ」

すると、どこに隠してあったのか武器箱が突然現れたのだ
中には、スナイパーライフル、マシンガン、アサルトライフル、さ
らにはロケットランチャーまであったのだ

兵「大将、これは何ですかい？」

仙「それは、天の国の武器だ、左の箱からスナイパーライフル、マ
シンガン、アサルトライフル、ロケットランチャーだみんな、好き
なのを持ってみてくれ」

すると、兵士のみんなは各々好きな武器を取った

仙「よし、みんな武器を取ったな？じゃあこっちに集まってくれ
講義を行なうから」

海の呼びかけでみんな集まった

仙「集まったな？じゃあこの武器たちの説明をするがその前に専門
の先生を呼んだから」

そう言うと、どこから現れたのか一人の男がいたその男は額にバン
ダナを巻いて左目には眼帯をしていた。ごそんじ、伝説の傭兵「ス
ネーク」だった

ス「今回、講議の担当をするスネークだ。よろしく」

仙「スネーク、皆初心者だから丁寧に教えてあげて」

ス「分かった」

そうして、まず最初に持ち出したのはアサルトライフルだった

ス「まず、このアサルトライフルだが、人で例えるなら歩兵だつま
り今の君たちということだ。こいつの特性は連射ができ、中距離の
相手なら殆ど倒せる。また、無駄に弾を消費しないために3点バ
ーストという特徴がある。3点バーストとは、一度引き金を引くと弾
は3発しか出ない仕掛けになっている。

次にスナイパーライフルについて説明するこの武器は弓矢よ
りも数倍の距離から相手を狙撃できる。ただし、物によってはアサ

ルトライフルみたいに連射はできないから注意するように。

そして、マシンガンは多くの弾を打ち出して敵の動きを牽制できる特徴がある。だが、リロードに時間がかかるからあわてない様にしてくれ。

最後にロケットランチャーだがこいつは、どんな武器よりも破壊力があるだから、相手が一斉にかかってきたときに撃つように。」

とそれぞれの武器の特徴を兵士たちに教えた
そして、それぞれの場所で練習を始めた。だが、あまりにも銃撃音がすごく大蓮達が鍛錬場に来ていた

大「なんなの？これは」

仙「あつ大蓮、それにみんなもどうしたの？」

雪「いや、すごい音がするから見に来てみたのよ」

仙「ふーんそうなんだもうちよつとやるけど見て行く？」

大「ええ、そうさせてもらっわ」

そうして、数時間、射撃訓練を行い訓練を終了させた

〈余談〉

雪「そういえば、海」

仙「なに？」

雪「この人誰？」

仙「ああ、紹介してなかったねスネークだよ」

蓮「すねーく？」

仙「ああ、おれの国じゃあ英雄的な人だよ」

ス「よしてくれ、海。俺はそんな大層なものじゃあない」

仙「そう言うなって」

大「どんなことをしてきたんだい？」

仙「俺達の国には核兵器っていうものがあってな」

祭「かくへいき？」

仙「そう、それは物凄く恐ろしいものなんだ一つの国を壊滅させるぐらいの威力はあるよ。スネークはそれを止めさせるために活動していたんだ」

冥「そんな、恐ろしい物が」

明「でも、それを止めるだなんてすごいですねスネークさん」

ス「当然のことをしたまでだ。俺は、政府や誰かのために動いてるわけじゃあない。いつも自分のためにやってきたそれだけだ」

蓮「でも、謙遜しすぎるのもよくないわよ。誰かが褒めてくれたならば素直に貰わないと」

ス「そうか？では、今度からそうしよう。それじゃ別の任務があるから行くとするか」

仙「おう、お疲れスネーク。次の任務もがんばってくれよ」

ス「ああ、海もがんばれよ」

そういうと、スネークはへりに乗って去って行った

仙「よし、俺らも飯にするか」

大「そうだねじゃあみんなで食堂に行こう」

こうして、東の間の休息を過ごす海たちであった

最終決戦へ向けての準備

しばらくは平穏な日々を暮らしていたがある日間諜が魏より戻った
という

報告を受けて軍議を開くことにした

冥「では、ただいまより軍議を行います」

大「頼むよ」

冥「はつではまず軍の数ですが、兵数は約50万近くになります」

雪「ほへへ」

蓮「そ、そんなに？」

祭「腕がなるわい」

と敵の数を聞いて各々の感想を述べていた

仙「よく、そんなに集められたな」

大「それが、魏の特徴だよ。名声・資金と共に充実しているからな」

仙「確かにな」

正史の三国志でも一番でかいのは曹操だからな

思「それで、今はどこにいるのだ？」

穩「それは、私が。今、曹操さん達は許昌で休んでいます」

蓮「開戦場所は？」

冥「おそらく、長江より南の場所ではないかと」

仙「赤壁か」

大「そうだね。こちらの兵数は？」

冥「約三十万ですね」

大「桃香の所は？」

仙「多くても二十万だそうだ」

雪「ちょうど同等って所ね」

仙「だな。これから、どうする？」

大「向こうもこっちの動きは感ずいているはずだからな。堂々と向
かおう赤壁で桃香たちと合流だよ」

冥「そうですね。では他に質問はあるか？」
しーん

冥「では、各々準備を開始せよ！」

全「応！」

それから、それぞれ準備に入った
俺は、自分の部隊へ行き具合を見た

（鍛錬場）

仙「よつみんな」

兵「大将！おはようございます！」

仙「ああ、おはよう。みんな聞いてくれ、いよいよ曹操と決着をつける時が来た。出発は明後日だみんなの力がいよいよ発揮される存分に使ってくれ！」

兵「サーイエッサー！」

（因みにこれは海が教えた物でみんなよく使ってくれているというしかも、強さは現代で言うなら海兵隊並に強くなっている）

仙「よし、訓練を行う！全員射撃用意！」

兵「サーイエッサー！」

それから三時間ぐらい訓練を行い。また、近接戦闘も教えた

最終決戦へ向けての準備（後書き）

作「作者です！」

仙「海だ」

作「いや、もうすぐ最終決戦だね」

仙「ああ、自分の部隊も持っていることだし存分に暴れさせてもらおう」

作「決戦の日には海君には現代兵器オールスターズでやってもらおうと思ってるんだけどどうかな？かな？」

仙「それは、お前が決めるんじゃないのか？」

作「だってこのお話ももうすぐ終わるんだよ？最後までくらは主人公の意見も聞きたいなあ」と思ってたさ」

仙「ん、俺としてはオールスターズにして欲しい所だが読者にも聞いてもらったらどうだ？」

作「それでいいの？」

仙「ああ。こっちで決めてもしようがないしな」

作「わかった。では、読者の皆さんに聞きたいと思います！最終決戦の時仙道海は現代兵器オールスターズにするかどうか意見をお願い

いします！意見は感想の所をお願いします。また、要望があればそれも入れたください」

仙「こんなダメ作者ですがよろしくお願いします」

作「ちよくと、海君そんなこと言わなくても良いじゃないか」

仙「黙れ、へボ作者」

作「うっうっひどい」

仙「では、作者をおいて・・・次回もお楽しみに!!」

準備2（前書き）

最終決戦だしっかり準備しないとな

準備 2

曹操との戦いに向けて着々と準備が進められていった。

長江つて確か海ぐらいの深さはあるかな？・・・だとしたら、” あれ”をだせるな

俺は、大蓮の所に向かった

コンコン

大「誰だい？」

仙「俺だ。」

大「ああ、海かちょっと待ってね」

中からガタガタと音が聞こえてきた。何かやっていたのだろうか？

因みにノックは大蓮達に教えていた

大「いいよ」

ガチャ

仙「悪いな」

大「気にしないで、それよりどうしたんだい？」

仙「ああ、ちょっと気になったことがあってな」

大「なんだい？」

仙「大蓮、戦場に向かうとしたら船で行くんだよな？」

大「ああ、そうだけど、それがどうかしたのかい？」

仙「いや、あつちに着いたら俺と一刀は別行動させてもらってもいいか？」

大「理由は？」

仙「なに、ちょっとした”プレゼント”をくれてやるのを曹操に」

大「ぷれぜんと？」

仙「ああ、プレゼントとは贈り物みたいなものだ」

大「ああ、贈り物ね」

仙「後、もうひとつあるんだけど」

大「なんだい？」

仙「どうにかして、曹操と話し合いに持ち込めないかな？」

大「どうしてだい？」

仙「三国同盟」

この言葉なら分かるだろう

大「なるほどね、きっと桃香達も同じところだろう私が桃香に言う
てみるよ」

よし、これで後のことも大丈夫だろ

仙「じゃあ、これくらいだな仕事に戻るよ」

大「ああ、がんばって」

さて、後は自分の準備だな

そう思って来るべき日に備えて部屋にこもった

昔の船ってこんなに揺れるんだ・・・

あれから、俺達の準備は整った

一行は赤壁に向けて船で移動中だ。

だが・・・

仙「気持ち悪い・・・」

祭「だらしないのう」

そう、昔の船は予想以上に揺れるのだ。これは、さすがの俺もビツクリ！

船には何回か乗っていたので船酔いはしないだろうと思ってましたが甘かったようです

仙「船には何回か乗ったことあったんだけどな」

祭「なんじゃ？乗ったことがあるなら、酔わないだろう、普通」

仙「予想以上に揺れるんだよ。あっちの世界だとほとんど揺れないから・・・」

祭「ほう」

祭さんは感心したようだ

祭「そうじゃ、海」

仙「なに？」

祭「堅殿から聞いたのじゃがお主と一刀は向こうに着いたら別行動をするんじゃないよな」

仙「そうだけど、それがどうしたの？」

祭「いや、ただ単に気になっただけじゃよ」

仙「まあ、曹操に贈り物をしようと思ってね。海戦に持ち込んだことを後悔させるような・・・ね」

今の海の顔は悪人顔であった。

祭「はっはっは、海、悪い顔になっておるぞ」

仙「そう？」

そんなに、悪人顔に見えるかな？まあ、あっちの世界でも同じこと言われた気がするな」

いつだかは忘れたけど・・・

祭「ああ」

仙「まつ祭さん達も驚くと思うよ。きつと」

祭「そんなにか？」

仙「楽しみにしてるといふよ」

祭「分かった」

仙「それにしても・・・」

祭「？」

仙「気持ち悪い」

祭「気合いが足りんぞ」

仙「そんなこと言われたって」

そう言いながらも祭さんの顔はとても笑顔だった

～夜～

仙「ふう」

大「海」

仙「大蓮か、どうした？」

大「私は、外の風を仰ぎたくなってね。海は？」

仙「俺もそんなところ」

・・・

しばらく、沈黙が続いた

大「ねえ、海」

仙「どうした？」

大「私、この先がどうなるか気になってしょうがないの。もし、曹操に敗れたらって思うと・・・」

大蓮は、自分たちが負けてしまったらと思っているらしい。俺がいるというに・・・

仙「大蓮」

だから、行動で示した

大「えっ？」

チュツ

大「ンン！？」

仙「ン」

プハッ！

大「海？」

仙「大丈夫、俺が付いてるんだ。天の身遣いである俺が・・・」

そう言ってニヤリと笑って見せた。

大蓮が心配しなくてもいいように、少しでも楽にできたらいいからな

大「そう、よね。こっちには身遣い様がついてるんだもんね」

仙「おう、大いに任せてくれてもいいぞ」

大「ふふっ、そうね」

そういうやりとりをやって、船の中に戻った。

俺達に敗北という二文字は存在しない。

俺が付いていれば、そう、天の身遣いである。俺が……

THE 赤壁

俺達は船で赤壁を目指し無事に到着することができた。

途中で一刀率いる、桃香達と合流し、合同で軍議をする事になった。

〔蜀呉の連合軍の領地〕

冥「では、これより蜀呉の軍議を行う。」

朱「今、私たちは赤壁の少し手前にいます。相手の数は50万、主に船上で戦うことになると思います。」

愛「そのことだが、我々の兵士達は船の上での戦闘が初めてなのだ。どうすればいい？」

穩「そのことについては、ご安心を。この地方に噂を流しておきましたから。」

桃「どんなの？」

冥「この地方の漁師たちは互いに助けるために自分の船と相手の船を鎖で繋げて安定性を高める方法を取っていると。」

一「なるほど、川に疎い魏なら、簡単にその情報を信じるというわけか。」

冥「その通りだ。なので、こちらもわざと、鎖を繋げて相手を信じ

込ませなければならぬ」

桃「なるほど」

冥「それから、進軍方法についてだが…」

大「あつちよつと待つてくれないかい？」

冥「どうしたのですか？大蓮様」

大「海が、ちよつとばかり提案があるそうだ」

仙「ああ、聞いてくれ、赤壁に着いたら、俺と一刀は一時戦線を離脱する」

桃「どういうこと？」

仙「まあ、ちよつとした”贈り物”を曹操に与えるわけだ」

桃「贈り物？」

仙「ああ、大蓮には了承してもらってる。後は、桃香しだいなんだが…」

桃「もちろん！いいですよ。海さんの力は知っていますし安心できますから」

仙「すまない、恩にきるよ。」

冥「では、その後の行動だが、我々、呉が左翼、蜀が右翼というこ

とでいいか？」

朱「そうですね。後、真ん中に合同の本体をおいて、三分割にしましよう」

冥「そうだな、では他に質問はあるか？」

・・・

冥「では。解散！」

そう言ったあと各々準備を開始した

〈蜀陣営〉

仙「じゃあ、行ってくるよ。大蓮」

大「ああ、気お付けてね」

仙「もちろん！俺には帰るべき家があるのだからな」

大「ああ、元気に帰っておいで」

そう言っつて天幕を離れた

〈蜀陣営〉

一「後もう少しで終わりか・・・」

桃「そうだね。ご主人さま」

—「いろいろ、あつたな・・・」

桃「そうだね」

二人は今までの出来事を振り返っていた

愛「ご主人さま、海殿がお見えになりましたよ」

—「そうか、じゃあ行ってくるよ。桃香」

桃「うん！気お付けてねご主人様！」

—「応！」

そう言つて海の方に向かった・・・

（赤壁に繋がる川）

今、俺と一刀は、近くの川にいた

—「なあ、海」

仙「なんだ？」

—「昼の軍議でも言つてたけど、プレゼントって何やる気なんだ？」

仙「まあ、簡単に言つて現代兵器オールスターズ」

これなら、一刀も分るだろう

「なるほどね。」

ジャーン！ジャーン！ジャーン！

仙「始まったか・・・」

「そうだな」

仙「そんじゃ用意しますか！」

そう言つて、創造した

仙「トレース・オン！」

ピカー！

「うお！？」

一瞬光つたが、大丈夫だろう

仙「よし、完成だ！」

「どれ？なつ！？」

「一刀が驚くのも無理はない。なんせそこに停泊していたのは、第二次世界大戦を駆け抜けた戦艦が数隻あったからだ。」

「すごい、大和からミズーリまで・・・」

仙「はは！どうだ！？」

く停泊している戦艦く

大和、武蔵、ミズーリ、オクラホマ、ビスマルク、の五隻

仙「こいつらで、突撃して混乱に貶める！」

—「やりすぎじゃないか？」

仙「そうか？」

—「ああ、第一、五隻もあるのに、どうやって動かす気だよ？」

仙「ああ、心配ない」

—「なんで？」

仙「全部、自動運転にしてある。だから、俺達は乗っているだけでいい」

—「なるほどな・・・」

やっぱり、思う。簡単に終わってしまうのではないか？

仙「それじゃあ、レッツ・ゴー！」

—「おー」

そう言って意気揚々と乗り込んだ二人移動を開始したのであった。

く赤壁く

海達が行った後、私たちは曹操と対峙した

ジャーン！ジャーン！ジャーン！

銅鑼の音が戦場に響く

大・桃「全軍、突撃ー！」

ウオオオオオ！！！！

そして、曹操軍とぶつかった。

最初は押していたが、段々と逆になってきた。

大「くそ、これじゃあまずいね！」

祭「そうですな！堅殿」

海達はまだ、来ないのかね？

と、その時

夏「孫文台！その首頂戴いたす！」

突っ込んできたのは魏武に大剣だった。

大「夏侯惇か！」

ガン！ガン！ガン！

しばらく、ぶつかり合いが続いた

その時！

ドォーン！

何かが響いた！

THE 赤壁 2

（海side）

俺と一刀はそれぞれの戦艦に乗って赤壁に向かった。そこに着くとすでに、戦闘が始まっていた

双眼鏡で見ると大蓮達が窮地に陥っていて丁度、夏侯惇と戦っていた。俺はためらわず、大和の主砲46cmを撃った

「撃て　！！」

（海sideout）

（大蓮side）

「撃て　！！」

その声とともに大きな音が聞こえた

ド　ン！！

いきなりの音に夏侯惇は慌てていた

「な、なんだ！？今の音は！？」

そこで、あたしが返した

「海がきたんだよ。あんたの主に贈り物をするために」

「な、なに!？」

さあここから、あたし達の反撃だよ!

〈大蓮 side out〉

俺は大和で砲撃を開始した。一刀も開始したようだ

「よし、どんどん撃てー!」

ドーン!ドーン!

46cm砲が火を吹く

俺は大蓮を探した

「大蓮、無事か!？」

「ああ、海ここだよ!」

そう言っって手を振る姿が目に入った

夏候惇は引いたようだ

俺は大和から大蓮が乗っている船に乗り移った

「無事か?大蓮」

「ああ、大丈夫だよ。それよりこれかい?海の言っってた物は?」

「ああ、未来の軍艦だ。これで覆す」

「へへすごいね」

大蓮は感心したように大和を見た

「まあこいつの威力を見てから感想を言ってくれよ」

そう言って大和に指示を出した

「撃て　　！！」

ドォーン！

「きゃっ!?!」

そう言って俺に抱きついた

おおー大きな双子山が俺の腕を埋めている

「か、海。今のは？」

「ああ、こいつの力でな。こいつなら一発で船を沈められる。見ろ」

そう言って、撃った方向を見ると炎上しながら沈没していく船があった

「どうだ？」

「す、すごい・・・」

この威力だ。この時代の船なんて紙屑も同然さ
相手なんか混乱に陥っているだろう

「さあ！曹操達を追い詰めるぞ」

「ええ、そうね」

そう言っつて再び戦闘に戻った。

（魏の船の上）

俺は大蓮と共に敵を蹴散らしながら敵本陣まで近づいていた

今、俺の手元にはギルガメッシュの剣を使っている（名前忘れた・・・）

兵士たちが寄つてたかつて向かってきた

「死ね！！」

「お前がな！」

ズバツ！

ドサッ

「海、これじゃあ進めないねー！」

ズバツ！

「ああ、そうだな！」

ザシュっ！

「どっつするっ？」

「簡単なことだ俺の力を使う」

そう言っつて剣を戻して創造を開始した

「トレース・オン！」

そう言っつて一丁のバルカン砲を作りだした

これは、メタルギアシリーズのバ○カン○イブンが使っつていた物だ

「さあ、ショータイムだ！」

キュイイイン

ドルルルルルル！！！！

そこから、無数の鉄の雨を降らせた

「よし！行くぞ！！大蓮！」

「応！」

そうやって敵中突破を開始した

数時間後、赤壁の戦いは俺達、連合の力で勝利した

曹操達は撤退したようだ

〈連合領地〉

「いや〜皆おめでとう！今回の戦いは無事俺達の勝利に終わった。だがしかし、曹操達は撤退してしまった。これでは、本来の目的が達成できない」

「海の言うとおりだよ。みんな、疲れているだろうけどなんとかして曹操達を話し合いの場に持ち込まなければならぬ。それまで皆の力貸してくれ！」

「応！」

誰も反対する物はいなかった。逆に皆賛成してくれた。

今度こそ終わりにして見せる。この乱世を……

海はそう思いながら祝杯に参加するのであった……

THE 赤壁 2 (後書き)

最終決戦とか言っていましたけどなんか違う方向に・・・

期待していた方ごめんなさい・・・

今度こそ最終決戦！！（前書き）

これで、終わりにしようかなって思っています。

今度こそ最終決戦！！

赤壁の戦いの後、曹操達は本拠地である許昌に戻って迎撃態勢を整えていた

俺達はそのまま進軍して攻撃を仕掛けるつもりだった

〈平原〉

「何もないな」

と俺が言う

「それは言ってもしょうがないんじゃないか？」

と一刀

「でもよ。あつちは迎撃態勢を取ってるんだぜ？奇襲とかあってもいいんじゃないか？」

「それは、曹操自身が許さないだろうさ。そんなことで勝っても将としての器が知れるからね」

「はあ〜そういうもんか〜」

そうこう話しているうちに自分たちが構築した拠点にたどり着いた

〈拠点〉

拠点についたあとしばらくしてから軍議が行われることとなった

進行は冥琳と朱里だ

「では、これより軍議を行う。朱里」

「はい、まず兵力数ですが・・・曹操さんたちの兵数は本拠地のと合わせて40万になります。対して私たちは海さんのおかげでほぼ無傷に近い状態です。」

「敵はどう出てくる?」

と思春が聞く

「敵は恐らく、粉骨碎身の覚悟で向かってくると思います。こちらが上とはいえ油断はしないでください」

と細心の注意を促した

「我々は攻撃態勢を三分割にする。第一波が愛紗・鈴々・翠・桔梗・祭の五人だ」

「……………応!」

「次に第二波には、蓮華さん・思春さん・明命さん・紫苑さん・蒲公英ちゃん・焰耶さん・恋さん・潜さん・白蓮さんの九人です」

「……………応!」

「そして、大三波が海・一刀・雪蓮・大蓮様・桃香の五人だ」

「「「「「応!」「」「」」」」」

「他に質問はあるか?」

.....

「では、解散!!」

そう言って軍議を終了した。

俺は準備を終えて、暇になったのでイメトレをすることにした。

「トレース・オン!」

そう言ってエクスカリバーを出した。

「そりゃあ!!」

ブオン!!

しばらく振って剣を収めた

パチパチ

「さすがだな。海」

「よう、一刀どうした?」

「いや、俺も一通りの準備が終わったから、トレーニングしよう」と

思ってたな」

「なら、一緒にやるか？」

「いいのか？」

「ああ、久々に一刀とやりたくなっただからさ」

「分かった。じゃあ武器を貸してくれ」

「おう。どれがいい？」

そう言ってバビロンを開いた

「相変わらず品揃えいいな」

「なんでもござれだ」

「じゃあこれするよ」

そう言って一刀が選んだものは銃剣付きのアサルトライフルだった

「一刀、それ好きだな」

「ああ、俺が唯一頼れる物だからな」

「じゃあ、俺も・・・」

そう言ってエクスカリバーをしまい、ゲイ・ボルグを取り出した

「おークーフリーンの物じゃねえか」

「だって、一刀がそれだしたときは本気モードだからな」

そう言っただけで、ボルグを構えた。対して一刀も構えな

しばらく、沈黙が続く……そして……

「はあ!!」

先に動いたのは一刀だった

銃剣をそのまま突いてきた。俺はそれを避けた

「よっ!!」

ガキン!!

そして、また間合いを保った。

「相変わらずだな……」

「そつちこそ」

お互いがこの世界に来て何も変わってなかった事を改めて実感し
また、ホッとしたような感じであった

「今度はこっちから行くぞ!!」

そう言っただけで間合いを詰めた

「そう簡単にやらせるか！」

一刀は迎撃態勢に入り俺の攻撃を受けとめようとした

だが・・・

「お前の心臓、貰い受ける！！ゲイ・ボルグ！！」

ヒュウウンー！！

目にも止まらない速さの技を出した

「なに！？」

即座に反応するが・・・

「おれの勝ちだな」

槍の矛先は一刀の首筋に来ていた

「あゝあゝまた負けちまったよ」

「そう言うなって一刀も格段にレベル上がったぞ？」

「そうかな？」

と話している時

パチパチパチパチパチ

「「ん？」」

見てみるとそこには、連合の武将たちが拍手していた

大蓮が前に出る

「すごいよ、海。」

「いや、そんなことないって」

「ご主人さまも凄かったよ!!」

「と、桃香」

二人とも照れくさそうに笑っていた。だが、改めて実感する。自分たちには帰るべき家があると・・・

～翌日～

俺達は全軍で曹操の城の前に並んでいた

「いよいよだな・・・」

「ああ、そうだね」

「大蓮」

「なんだい？」

「必ず、勝とうな」

「ええ」

「それじゃあ、号令の方よろしく！」

「ええ」

そうやって俺は後方に下がった

しばらくして……

ジャーン！ジャーン！ジャーン！

前の方から銅鑼の音が聞こえて……

「全軍、突撃ー！！！！」

大蓮と桃香の号令とともに第一波が突撃を開始した。

しばらくは、様子見であったが、危なそうなところがあるはずさま、後方支援を行った

そして……

ジャーン！ジャーン！ジャーン！

第一波が終了し第二波が突撃した

相手の方は段々と押されているようにも見えたが武将は粉骨碎身の

覚悟で立ち向かっていった

そして・・・

ジャーン！ジャーン！ジャーン！

第二波が終了し俺達の番が来た

「行くか・・・」

そう言つてバビロンからゲイ・ボルグを取り出し突撃を開始した

しばらくしてどんどん進んできたが敵の方は疲れているらしく殆どが降服状態だった

その時！

「仙道、海だな？」

現われたのは魏武の大剣・夏侯惇だった

「夏侯惇か」

「あの時の借り返させてもらつ」

「できるかな？」

そう言つてニヤリと笑つて見せた

「貴様——！！」

ブオン！！

「おっと」

「貴様！よけるな！」

「避けなかったら死ぬだろ？」

「うるさい！！」

ブオン！！

「まだまだ、甘いな・・・」

ガキン！！

「なに！？」

「こっちから行かせてもらっぞ！！はあ！！！！」

そう言っつて槍を奴の腹にくらわせた

ドカツ！！

「グハ！？」

「そろそろそろ！！！！」

「くっくっくそくなめるな！！！！」

「よっ」

スタツ

そうして、間合いを離した

「ふむ、あまり時間をかけるのも良くないか……」

「何をごちゃごちゃ言っている！さっさとかかってこい！！」

「言われなくても……」

そう言つてバビロンを開き発射態勢に入った

「ゲート・オブ・バビロン！」

シュシュシュシュ！！！！！！！！

「うっうわあああああ！！！！！！」

無数の武器が夏侯惇に向かって解き放たれた

土煙が収まった後、夏侯惇を気絶したようだ

「終わりだな……敵将・夏侯惇、捕えたり！！」

全体に響くような大声で叫んだ。

その後、曹操自身も降伏しこの戦闘に終止符を打つことができた

俺も曹操がいる所に向かった

（連合陣地）

行ってみるとみんな集まっていた

「それで？私たちはどうなるのかしら？」

曹操は捕虜とは思えない威厳を放っていた

そこで、大蓮が答える

「本来なら、斬首と言いたいところじゃが・・・曹操、話がある」

「何かしら？」

「これから先、我々が争っていたら国にも民にも被害が出る。それは、お主とて本意ではないじゃろ？」

「・・・・・・・・」

曹操は黙って聞く

「それならば、いつそう三国で同盟してお互いの国々を協力しなければならぬ。ただ、一つの国が頂点に立つてもいつかは壊れてしまふ。それならば互いで協力し監視し合うというのはどうじゃ？」

「それで？私は敗将よ？国も持っていないし」

「ならば、ここでもう一度、魏を建国すればいい。証人は私と桃香がいる」

「うん！そうだよ。曹操さん私たちに協力してくれませんか？」

「だからさつきから言ってるでしょ？私は負け。負けたら勝った方の言うことを聞かなければならない」

と言った。なるほどなんだかんだ言いながら桃香達の理想に賛成ってわけか

「そう。分かったわ。なら、曹操、あなたは魏を立ち上げなさい。そして、私の盟友になってくれないかい？その証として真名を教えるわ」

「あ！私もー！」

「ふっ盟友ね・・・分かったわ。なら、私も教えなければならないわね」

そう言っ互いに握手をした。

これで、この乱世にも終止符を打つことができたわけか・・・

平和な世が続くかどうか分らない。だったら俺が何度だって止めてやる。

この力がある限りすべては世の為人の為に・・・

今度こそ最終決戦！！（後書き）

シュヴァルツです。

初めての作品がようやく終わりました。

今までお読みになってくださった方々、また、感想を送ってくれた方々本当にありがとうございました。

では、またいつか、どこかでお会いになりましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9140m/>

恋姫無双と一人の創造主の冒険

2010年11月27日00時06分発行